ooo after ～夜天の主と欲望の王～

a-o-w

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｏｏｏ　ａｆｔｅｒ　～夜天の主と欲望の王～

【Ｎコード】
Ｎ７３７６Ｚ

【作者名】
ａ－ｏ－ｗ

【あらすじ】
今までずっと一緒に戦ってきた『腕』と
再び再開するため旅を続けている
無欲な青年、「火野　映司」が旅の途中でたどり着いたのは、
魔法文化が発達した世界、「ミッドチルダ」だった。

そこで映司は「４人の守護騎士」と、
「夜天の主」に出会い、
とある事件に巻き込まれていく。

「俺が護る！」

仮面ライダーＯＯＯ　の「もしも」の物語、始まります。

０００話　無欲とパンツと仮面ライダー（前書き）

今回初めての小説の投稿です。
はっきりいって文章力と国語力は０に等しいです。なるべく見てくださる皆様にわかってもらえるよう努力していきますのでよろしくお願いします。

あとスマホでの投稿なので途中　ん？　となることがあるかもしれません。
ご了承ください。

私の完全な自己満足な小説なので完成度はあまり期待しないでください。
あと小説を見て、気分が悪くなった方は閲覧をやめてください。文句、クレームも一切受け付けません。

０００話　無欲とパンツと仮面ライダー

暗い森の中、
少し変わった格好をした
２０代ぐらいの青年が歩いていた。

???「はぁ…はぁ…　完全に迷ったなぁ、携帯は繋がらないし、
ここがどこなのかわからないし、はぁ～…」

その青年は旅をしている。
一緒に戦ってきたかけがえのない『腕』を探すために。

???「…ま、まぁなんとかなるでしょ、なんにも持ってないけど、
明日の『パンツ』はちゃんとあるし！」

青年はまた再び歩き始めた。先の見えない旅の出口を目指して…

彼、青年の名は　　ー　火野　映司ー

またの名を、　『仮面ライダーオーズ』

００１話　世界の破壊者とパンツと異世界

映司「…結構歩いたなぁ、でもいくら歩いても　木　ばっかりだなぁ」

無欲な青年、火野　映司　は、いまだに森をさまよい歩き続けていた。

映司「お～い、誰かぁ！いませんかぁ～！？助けてくださぁ～い！！　…いるわけないか、…困ったな、お前だったらどうする？

……　―アンク―　」

映司はポケットから２つに割れた『メダル』を取りだし、悲しげな顔をしてそれを見つめる…。

映司「お前がいなくなってから、毎日が寂しいよ、アンク。いままでお前を復活させるため、いろいろな国を旅してきたけど何一つ手がかりがなかったよ…、なんかもう、やっぱり無理なのかな…」

その時、いきなり木から果物が落ちてきて、映司の頭に…、

―ゴンッ！―

映司「…ッ！　いってぇぇエエエ！！」

見事　ｈｉｔ　した。

映司「…ははッ！　そうだよな、俺、何弱気になってるんだろう、ごめんアンク！まだ俺諦めないから！絶対お前を見つけ出すから！」

映司は空に向かって叫びだした。

「必ず、お前を、見つけ出すからぁッ！！！」

叫び終わった後、映司は落ちてきて果物を手に取り、食べながら歩き出す。

映司「よし、頑張ってこの森から抜けだすぞ！次はこっちにいって
　『おい、オーズ…』
　…ん？　だ、誰！？」

どこからか、声が聞こえてきた。

？？？「こっちだ、うしろだ。」

映司「うしろ？…あ！　あなたは！？　」

そこに立っていたのは、
かつて「世界の破壊者」と言われた者、
『仮面ライダーディケイド』だった。

映司「お久しぶりです！ディケイドさん！
ショッカーの件以来ですね♪」

ディケイド「ディケイド『さん』ってお前…
まったくお前を呼びに『この世界』に来てみれば、お前こんなところで何してるんだ？」

映司「いや～旅してたら道に迷っちゃって、ははッ！、…ん？俺を呼びに来たってどういう意味なんですか？」

その場の空気が一気に変わった…。

ディケイド「いいか、よく聞けオーズ…、お前はこれからある世界に行ってもらう、そしてお前には『ある事件』を解決してもらう、悪いがこれは『オーズ』にしかできないことだ、だいたいわかったな？」

映司「『だいたいわかったな？』…って全然わからないですよ！一体なにがどうなってるんですか！？だいいち、俺はもうオーズには…」

ディケイド「よし、よくわかってくれた、この世界のためにせいぜい死なない程度に頑張ってきてくれ、じゃあな。」

突如、映司の前に灰色のオーロラのカーテンが現れ、迫ってくる！

映司「ちょっとぉ！　全然話聞いてないじゃないですかぁ！ま、まって、あああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……。」

映司は完全にこの世界から消え去った…。

ディケイド「すまない、オーズ…、さすがに無理矢理すぎたが、本当にお前にしかできないことなんだ…。
頼むぞ、『仮面ライダーオーズ』　」

森には再び静寂になった…。

？？？「はやてちゃ～ん！！！」

？？？「ん？どないした？リィン」

リィン「空から、ぱ、ぱ……。」

はやて「ぱ？」

リィン「パ、パンツが
落ちてきたんですぅ！！！！！」

はやて「……はい？」

映司「…っ痛てて、なにが起こったんだ？」

映司は辺りを見回す。そこは見たことのない建物の廃墟が一面に広がっていた。

映司「…え、え？えぇぇぇぇ！？！？」

――――物語は始まった。

００２話　騎士とヤミーと復活のオーズ

時はさかのぼり、ミッドチルダ
機動６課隊舎

ブリーフィングルームにて会議が行われていた。

そこにいたのは
機動６課部隊長「八神はやて」
スターズ隊長「高町なのは」
ライトニング隊長
「フェイト・Ｔ・ハラオウン」
の、３人だった。

なのは「はやてちゃん、それで話って？」

はやて「えっとな、ついこの前の事なんやけども、ミッドチルダ市街地で殺害事件があったんや。で、目撃者の話によると、『怪物に襲われてた』っていう証言なんよ」

フェイト「でもミッドに『怪物』なんて…」

はやて「うん、一度も確認された事はないんよ、と、いうことは、別の世界から来たとしか考えられへん。」

なのは「待って、でも、管理局のデータベースには…」

はやて「そう、そこや、なのはちゃん。時空管理局に引っかからずにこのミッドチルダに次元移動なんてまず無理なんよ。と、いうこ

とは、最初からこの世界にいた、ということになるんよ」

フェイト「ッ！　そんな！？」

はやて「まぁ、フェイトちゃんが驚くのも無理もないなぁ、とにかく、

この事件は私とヴォルケンリッターが主体となって動きます。事によってはフォワードと隊長陣も動くことになるかもしれないので頭に入れといてください。」

なのは＆ａｍｐ；フェイト「了解！」

―隊舎　廊下―

なのは　と　はやてが歩きながら雑談していた。

なのは「それにしても大変だよね、ＪＳ事件が片付いて一段落したと思ったら次から次へと事件が押し掛けてきて、

はやてちゃん、体大丈夫？」

はやて「なのはちゃんにそれ言われる日がくるとわなぁ…。」

なのは「にゃはは、でも例の事件、はやてちゃんとシグナムさん、それとヴィータちゃんにシャマル先生とザフィーラさん達だけで動くってことでしょ？未確認の生物相手にたった数人でって、いくらなんでも危険なんじゃ…」

はやて「大丈夫、心配あらへんよ」

はやては胸をはって言った。

はやて「なんてったって私は歩くロストロギア、『夜天の主』であの子達は私を守る守護騎士たちや、なんの問題なんてあらへん！」

なのは「そっか、わかった！でもくれぐれも無茶だけはしないでね。」

はやて「ありがとう、なのはちゃん。さて、そろそろあの子達にも説明しておかんと、またね！なのはちゃん！」

なのは「じゃあね！はやてちゃん！」

それからしばらく時間がたち、はやての周りにはヴォルケンリッター全員が集められていた。

烈火の将　剣の騎士　シグナム

紅の鉄騎　鉄槌の騎士　ヴィータ

風の癒し手　湖の騎士　シャマル

蒼き狼　鉄壁の守護獣　ザフィーラ

それと、今は亡き『祝福の風』の名を受け継ぐもの、　リィンフォース？

はやて「…と、いうことなんや。皆、わかった？」

シグナム「主、はやて　確認されている怪物というのはその一体だけなのですか？」

はやて「せや、だけどくれぐれも気を抜いちゃだめや、もしかしたら増援もあり得るからなぁ」

ヴィータ「まぁその怪物を取っ捕まえて全部吐かせりゃそれで事件解決って事だな！」

シャマル「こら、ヴィータちゃん。女の子がそんな汚い言葉遣いしちゃ駄目でしょ！」

ザフィーラ「シャマル、突っ込むところが色々と違うぞ。…主、基本はシャマルと隊舎で待機という形で良いのだな？」

はやて「せや、基本は私とシグナムとヴィータが前線にでて、シャマルとザフィーラは待機や、あ！リィンもな！」

リィン「了解ですぅ！」

はやて「それじゃあ皆、気合いいれて、任務、開始！」

ヴォルケンズ「了解！」

それからまた月日がたち、現在、シグナムとヴィータがパトロールをしていた。

ヴィータ「なあ、シグナム～」

シグナム「なんだ、ヴィータ」

ヴィータ「こんなところに未確認なんか現れるのかよ～」

シグナム「一様確認だ、まぁ人は住んでいないがな」

今パトロールしている場所はかつてジェイル・スカリエッティのガジェットドローンと交戦があった市街地である。今はとても人が住める場所ではない。

シグナム「前に報告があった件以来、一度も事件が起きないのも奇妙だ。できれば機動６課が解隊になる前に解決したかったのだが」

ヴィータ「そっか、試験運用期間も残り数週間だもんな、あいつらもだいぶ成長し『えええぇぇぇぇ！？』、な、シグナム！」

シグナム「悲鳴というより驚き声に聞こえたが、いくぞ！ヴィータ！」

二人は急いで悲鳴？が聞こえた現場に向かった。

その頃…

映司「ちょっと待てよ！ここどこ！？ま、待て、落ち着こう、そうだ、落ち着いて、えっと…」

ヴィータ「なんだ、一般市民か、こんなところでなにしてんだ？」

タイミングよくヴィータが空から降りてきた。

映司「あああああ！！！コスプレした女の子が空から降りてきたぁぁ！！！！！！！！！」

ヴィータ「な！？コスプレじゃねえ！これは　はやてが作ってくれた…」

映司「あああああああ！！お巡りさん！お巡りさん！！！後藤さぁぁぁん！！！！！！！！！」

ヴィータ「おい！話を聞きやがれ！！殺すぞ！！！」

シグナム「何をしている！？お前たち！」

思わずシグナムは突っ込んだ。

ー数十分後ー

シグナム「とりあえず落ち着いたか？青年」

映司「はい、すいません取り乱しちゃって、えっとあなたは？」

シグナム「私は、…ッ！？」

ガキィンッ！！

その時、なんの前触れもなく報告にあった未確認生物が襲ってきた！
シグナムはギリギリのところでガードした。

シグナム「まったく…いきなりだな！」

ヴィータ「こいつが未確認か！おいそこのへんな格好の男！死にたくなかったらはやく逃げろ！」

映司「へんな格好って…、ていうか！あれって…『ヤミー』！？」

そう、報告にあった未確認生物というのはまさに『ヤミー』の事であった。

ヴィータがグラーフアイゼンを構えて戦闘体制を整えていると…

？？？「どこを見ている！」

ヴィータ「ッな！？」

ガキィン！

なんともう一体のヤミーも現れた！

ヴィータ「おい！もう一体なんて聞いてないぞ！？」

シグナム「くそッ！思っていた以上につよい、このまま長期戦に『よこせ…』ッ！？」

ヤミー『お前達の強さを、よこせ！』

映司「このままじゃまずい！でもどうすれば！？」

その時、映司のポケットに違和感があった。

映司「な、もしかして？」

ポケットを探ると、そこには
黄色のメダルと、緑のメダルと、
ー　ー　ー　割れたはずのタカメダルがあった。

映司「なんで！？どうして…」

だがその時ヴィータと交戦していたヤミーが映司に襲いかかった！

ヴィータ「な！しまっ…」

ヤミー『よこせェェェ！！！！！』

映司「ッ！！！」

映司はギリギリのところで交わし…

シグナム「貴様なにしてる！？はやく逃げ…」

オーズドライバーを腰に巻き付けメダルをセットし…

ヴィータ「ッ！？」

メダルをスキャンする！！

映司「変身ッ！！」

『タカ！　　トラ！　　バッタ！
タ・ト・バ！　　タトバ！タッ！トッ！バッ！！』

シグナム「な、なんだあれは…！？」

ヤミー『オーズ…オーズゥッ！！！』

今、ミッドチルダに
『仮面ライダーオーズ』が復活した。

００３話　謎の声と機動６課と新たなグリード

ヴィータ「なんだ？一体何が起きてるんだ！？」

ヴィータが驚いているのも無理もない。
なにせいきなり未確認が現れて、戦闘になり、もう一体未確認が現れ、
自分を小馬鹿にした（と思っている）変な格好をした青年が変な歌を流して上下三色の怪人？になったからである。

これにはさすがにシグナムも驚きを隠しきれない。

オーズ「変身できた…！よし、いくぞ！」

オーズはトラクローを展開して…

ジャキィンッ！

ヤミー『グァァッ！』

ヤミーのお腹を切り裂いて、断末魔をあげ
その場に転がり回った！
お腹からセルメダルが大量にでてきた！

オーズ「やっぱり、こいつらヤミーだ！でもなんで？グリードなら全員…」

ヤミー『なによそ見してやがる！』

倒れたヤミーが再び襲いかかって、

ドゴォ！

オーズ「うわぁッ！！」

不意討ちをくらい、トラアームのパワーが
出せなくなってしまった。

オーズ「うわぁ！トラメダルさんごめんなさい！ど、どうすれば！？」

その時、どこからか…

『…いじ、映司！これ使え！！』

オーズ「い、今の声、どっかで…っ痛た！」

空から突然『ゴリラメダル』が降ってきた。

オーズ「ゴリラのメダル！？さっきからわけわかんない事ばっかだけど、これなら！」

オーズは中央のメダルを変えて、再びオースキャナーでスキャンする！

『タカ！　ゴリラ！　バッタ！』

オーズはタトバコンボからタカゴリバへ
亜種チェンジをした。

ヴィータ「腕の形状が変わった！？」

ヤミー『くそ！なぜこの世界にオーズがぁ！？』

オーズ「はぁぁ！セイヤー！！」

オーズはゴリバゴーンを射出し…

ヤミー『グワァァァッ！！！！！！！』
ドゴォンッ！！

ゴリバゴーンに当たったヤミーはその場で爆発し、大量のセルメダルを撒き散らした。

その頃シグナムは…

シグナム「ふっ、最初はどうなることかと思ったが、なんだ、攻撃もワンパターンで力だけではないか」

ヤミー『この女、強い！その力、欲しいぃ！！』

シグナム「終わらしてやる、レヴァンティン！ロードカートリッジ！！」

ガシャコンッ！！

ヤミー『な、なにぃ！？』

シグナム「紫電…一閃！！！」

ヤミー『グワァァァッ！！！』

ドゴォンッ！！！

ヤミーはシグナムの一撃により、爆発し、大量のセルメダルを撒き散らした。

シグナム「なんだこれは？コイン？、いや、メダルか？」

とりあえず一段落し、シグナムはオーズとヴィータに合流した。

ヴィータ「おい！…えっと、タトバ！！」

オーズ「違うよッ！！この姿は『オーズ』っていうんだ。」

ヴィータ「じゃあさっきのタトバの歌はなんだ？自分の名前を歌ってたんじゃなかったのか！？」

オーズ「歌は気にしなくていいよ！」

ヴィータ「気にならないほうがおかしいだろぅが！！」

シグナム「いい加減にしろ！ヴィータ！！」

ポカッ！

ヴィータ「いってェ～…グスッ」

シグナム「うちのヴィータがすまなかった、とりあえず、なんだ、それを脱いではくれぬか？」

オーズ「あぁ、そうですね、わかりました！」

オーズは変身を解除し、人間の姿になった。

シグナム「色々と質問したいのだが、まずお互いの自己紹介から始めよう、私の名は『シグナム』古代遺物管理部機動６課ライトニング分隊の副隊長だ」

映司「俺は『火野　映司』っていいます！それでさっきの姿は『オーズ』っていう、えっと、正義の味方ってやつかな？」

シグナム「『火野　映司』か、さっきは助かった、礼を言うぞ、火野」

映司「いえいえ、こちらこそ…『おいッ』ッ！？」

ヴィータ「さっきからシカトしてんじゃねぇ！私には聞かないのか！？」

映司「あぁ、ごめん！えっと、お名前はなんていうんだい？」

ヴィータ「私はヴィータ、機動６課スターズ分隊の副隊長だ。」

映司「ヴィータちゃんかぁ、かわいいお名前だね♪」

ヴィータ「お前絶対子供扱いしてんだろ！」

シグナム「まぁ落ち着け、ヴィータ。…火野、いきなりで悪いが色々と聞きたいことがある、私達の隊舎までついてきてくれないか？」

映司「はい、いいですよ。もともといく宛もないし、俺が今、どこにいるかさえもわからないし…」

シグナム「すまない、今すぐ迎えのヘリを呼ぶ」

映司（それにしてもさっきの声、いったい…）

―ヘリコプター内―

ヴィータ「映司」

映司「なに？ヴィータちゃん」

ヴィータ「お前は私が殺す」

映司「ッなんで！？」

シグナム（こいつら、見てて飽きないな…）

ー機動６課　部隊長室ー

一人、落ち着かない人間がいた。

はやて「……。」

リィン「はやてちゃん、さっきからペンで机叩くのうるさいですぅ」

はやて「だってなぁ…、リィン、さっきヴィータから連絡あったんやけどなぁ、『未確認二匹でて、変な格好したやつも現れて、タトバ歌ってセイヤーして片付いたから映司つれてそっち帰るぞ！』って、…状況わかる？リィン？」

リィン「ヴィ、ヴィータちゃんには、なにも悪気はないんですよ！」

はやて「まぁその『映司』って人も気になるなぁ、もしかしたら未確認についてなにか知ってるかもしれんな」

リィン「あ、着いたみたいですよ！」

ヴィーン

ドアが開く。

シグナム「主、はやて、ただいま戻りました」

ヴィータ「はやて、もどったぜぇ！」

映司「こ、こんにちわ～」

はやて「ほな、お疲れさんな。…あなたが映司さん？」

映司「は、はい！火野　映司です！」

はやて「そんな硬くなんなくてえぇよ、私の名前は『八神　はやて』よろしくな、映司くん！」

映司「そうだね…、よろしく！はやてちゃん！」

それから小一時間、お互いのこと、世界の情勢のこと、オーズのこと、魔法文化のことなど話合った。

映司「知らなかったなぁ、本当に魔法があるなんて！はやてちゃんなんか魔法みせてよ！」

はやて「多分映司くんの想像してる魔法とはかなり違うとおもうぁ…てか、映司くんのその『オーズドライバー』ってデバイスとはまた違うんか？」

映司「う～ん…近くて、遠いのかなぁ？」

そんな話もしつつ、

はやて「あ、忘れてたぁ！映司くん、あの未確認生物についてなに

か知っとることある？」

映司「えっとね…、簡単に説明するよ」

その場の空気が重くなりつつ、映司は口を開いた。

映司「あれは、『ヤミー』っていう、人の『欲望』をエサにする怪物なんだ。」

はやて「欲望？」

映司「うん、いっぱい食べたいとか、お金持ちになりたいとか、綺麗になりたいとか、そんな人の欲望をエサにするんだ」

シグナム「つまり、ヤミーが生きていくには人の欲望が不可欠、ということは、その親は人間ということなのか？」

映司「察しが良いですね、シグナムさん、その通りです。」

はやて「でも、そのヤミーってどうやって生まれるん？」

映司「大事なのはそこなんだ、はやてちゃん。そのヤミーを生み出す上位に位置する者がいるんだ、それが、『グリード』」

はやて「グリード…」

ヴィータ「つまりその『グリード』がいるかぎりヤミーは生まれ続けるってことか」

映司「でも、おかしいんだ、グリードはもう全員消滅したはずなんだ」

はやて「てことは、映司くんも知らないグリードがこのミッドチルダに存在してるってことか、はぁ、一件落着と思ったけど、そういうわけにもいかないようやなぁ」

映司（俺の知らないグリード…、ディケイドさん、これが俺がこのミッドチルダでやらなければいけない問題なんですか？）

―とある洞窟にて―

???「あれぐらいの人間の欲望では、まだこの程度のヤミーしか生まれないか、まぁいい、まさかオーズがこの世界にやってくるとはなぁ、おもしろい」

???は洞窟をでて、空を見上げる。

???「邪魔はさせんぞ、オーズ。俺は必ずこのミッドチルダでやってやる！！！

世界の、終焉をッ！！！！！」

ついに謎のグリードが動きだす…。

００４話　隊長陣とフォワードと新たなヤミー

ヤミーとグリードについて話会った後、

はやて「と、いうことで、グリードを退治するまで映司くんを民間協力者っていう立ち位置になるんやけど、ホントにえぇんか？」

映司「うん、もともとグリード退治は俺の分野だからね、それに人は助け合いする生き物でしょ！」

はやて「うん、ありがとうな、映司くん…そうや！せっかくだから映司くんにうちの部隊のメンバー紹介するぁ！」

ちょうど昼ごろだったため、食堂に皆集まっていた。

はやて「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

なのは「あ、はやてちゃん！お疲れ様！」

フェイト「はやて、そちらの方は？」

はやて「紹介するわ、この人は『火野　映司』くんや、私となのはちゃんと同じ地球出身や！」

映司はなのはに頭を下げる。

映司「どうも、はじめまして、『火野　映司』です！よろしく、なのはちゃん！」

なのは「よろしくね、映司くん！」

そして、フェイトにも頭を下げようとするが…

映司「あ、あぁ…」

フェイト「ど、どうしたのかな？映司？」

はやて「ん？えーじく～ん？」

映司（な、なんだこの胸の痛み！？た、たしか前にもこんな事あったような！？フェ、フェイトさん、すごく美人だな、だ、駄目だ、ま、まともに話せない！！！久しぶりの『ラブッ！　ラブッ！ラブゥゥゥ！！！！』）

今、映司の心の中で、『ラブラブラブコンボ』にコンボチェンジした。

はやて「あ、駄目や、完全にフェイトちゃんに目ぇいっとる」

フェイト「？」

映司「あ、え、映司でし！よろしくお願いします！フェイトさん！！」

年下なのになぜか敬語になってしまう映司だった。

そして、次のテーブルに向かうとなのは達より更に若い四人が座っていた。

その中の内、青いショートヘアの女の子が
いきなり映司に話しかけてきた。

スバル「こんにちわ、映司さん！さっき部隊長室通りすぎるとき、全部映司さんのこと聞いちゃいました！変わったデバイス持ってるんですって！？ぜひ、今、機動させて…『ポカッ！』…痛て、なにすんの～ティア～」

ティアナ「なに盗み聞きしたこと普通に話しちゃってんのよ！バカスバル！！…すいません、映司さん、怒ってません？」

映司「大丈夫だよ、スバルちゃんにティアちゃん、こんど機会あったら見せてあげるから、ね？」

スバル「ホントですか！？やったぁ！！！！！」

ティアナ「全く、救いようのないバカね…」

エリオ「ついに、ついにまともな男の人が身近に…」

キャロ「良かったね！エリオくん！」

…映司はエリオとキャロの二人を見ながらふと思った。いくら成人年齢が低いとはいえ、
子供が前線に立って戦うことにはあまりいい気はしなかった。

映司（この子達は自分の意志で戦っている、俺がなにかしても恐らくこの子達の考えは変わらないだろうな、でも、あんまりいい気はしないかな）

映司「エリオくんにキャロちゃんだね、よろしく！」

エリオ&キャロ「はい！」

はやて「それと、映司くんにはまだ紹介してなかったけど、ヴォルケンリッターにはまだあと二人いるんよ」

映司ははやてと一緒に医務室に寄った。

シャマル「あら、はやてちゃん！それに、あなたが映司くんね♪」

映司「はい、これから少しの間、よろしくお願いします！…えっとザフィーラさんも、よろしくお願いします！」

ザフィーラ「……。」

シャマル「ザフィーラはちょっと人見知りだからねぇ、ごめんなさい…でも大丈夫！すぐ仲良くなれるわ！」

映司「はい！」

そして一段落したころ…

ー隊舎　廊下ー

はやて「そういえば映司くん、なにか生活で必要なものあるか？」

映司「大丈夫！俺はちょっとの小銭と明日のぱ……ない」

はやて「？」

映司「ない、ない！ない！！」

はやて「どないした？映司くん！？」

映司「明日のパンツがないぃぃ！！！！！！！！！！」

映司はフェイトの時以上にものすごくテンパっていた。

はやて「明日のパンツって…あ！もしかしてこれか！？」

それは、今朝リィンが拾ってくれた映司のパンツだった。

はやて（てか、これ映司くんのパンツやったんか）「『あ、あ、』…ん？」

映司「ありがとぉぉぉ！！！！！！！！！！」

映司は　はやてを抱き締めてしまった

はやて「な、な、…。」

思わず　はやて　は赤面になり…

はやて「なにするんじゃこのど変態がぁぁぁぁああああ!!!!!!!!!!!!!!」

ドゴォォォォンッッ!!!!!!!!!

映司「な、なんで、…俺、なにかしたぁ?…………ドタッ…。」

一方その頃…

市民「た、助けて、俺が、いったい、何したって…」

ヤミー『よこせ、お前の力、よこせェ！！！！』

市民「あ、あ、あ、ああああぁッッ！！！！！！！！！…。」

また、あらたな事件が起こっていた…。

００４話　隊長陣とフォワードと新たなヤミー（後書き）

う～ん、パンツのくだりとフェイトのくだりは蛇足だったかなぁ～…。

００５話　捜索と共闘と変形自販機

映司は機動６課に居候することになった。

次の日の早朝…

ティアナ「さて、今日の朝練もはりきっていくか…って…え、映司さん？なにしてるんですか？」

映司「あ、ティアちゃん、おはよう！」

そこにいたのは、掃除婦の格好をして掃除をしている映司だった。

ティア「別に民間協力者だからそこまでしなくても…」

映司「でも、だからって何もしないわけにはいかないし、それに俺はこういう仕事好きだから！」

ティア（映司さんってホントにお人好しなのね。）

それから少し時間がたち、ちょうど朝食の時間になった頃、映司はフォワード達と朝食をとっていた時、シグナムが深刻な顔をして話しかけてきた。

シグナム「火野、食事中悪いが、ちょっとブリーフィングルームまで来てくれないか？」

映司「え？はい、（もしかしてまたヤミー？）」

―ブリーフィングルーム―

そこには　はやて　とヴォルケンリッター達が集合していた。

はやて「すまんな、映司くん、まぁだいたい状況はわかるやろ」

映司「うん、またヤミーが現れたんだね」

はやて「せや、今日の朝方、管理局地上本部付近にて、Aランク魔導師一人の死体が発見された。死体の状況から見て、間違いなくヤミーの仕業や」

ヴィータ「死亡推定時刻はだいたい昨日の夜ってとこだな」

シャマル「Aランク魔導師がやられたってことは…」

ザフィーラ「ああ、この前よりパワーが上がってるヤミーということだな」

シグナム「だが、ヤミーの動きがまったく掴めんな、一体何が目的なんだ？」

映司「う～ん…、っ！リィンちゃん！！」

映司が突然大声をだし、周りは驚いた。

リィン「な、なんですか？」

映司「今まで襲われた人達の職種ってわかる！？」

リィン「えっと…、全員管理局の職員です！」

映司「たしか魔導師には『ランク』ってのがあるんだよね！？皆のランクは！？」

リィン「えっとですね…、これって…ッ！」

はやて「なんや、リィン！？」

リィン「皆、Aランク以上です！」

シグナム「そうか、ヤミーが狙っているのは魔導師ランクが高い職員を狙っているのか！」

ヴィータ「あの時のヤミーは『力よこせ』って言っていたけど、また同じ人間のヤミーってことか？何匹連れてるんだ？」

はやて「なるほどなぁ、せやけど次襲われるAランク魔導師なんて特定できんなぁ、いっぱいおるし…」

映司「大丈夫だよ、はやてちゃん！」

映司は確信のついた表情で、再びリィンに質問した。

映司「最近地上本部で、急激にランクが上がっている、魔導師っていない！？」

リィンはパソコンで調べると…

リィン「いました！ついこの前までCランクだった魔導師が、A＋まで上がってます！！これは…地上本部の警備員です！！」

ヴィータ「間違いない！そいつがヤミーの親だ！」

はやて「まさに『灯台もと暗し』か…、よし！今回はヴィータと私と映司くんの3人で出撃します！シグナムとシャマルとザフィーラは待機や！」

全員「了解！」

ー時空管理局地上本部　地下駐車場ー

そこに、一人でブツブツ喋りながら循環警備をしている警備員がいた。

警備員「ははは、最初あの化け物を使って人殺してしまった時は恐ろしすぎて、数ヶ月は使う事できなかったが、慣れてしまえば、なんとも思わないな！もう少しで、もう少しで直属の局員になれる…ッ！…そうだ…別に俺が殺してる訳じゃない…全部あの化け物がやった事なんだ！俺は誰も殺してなんかない！！！！はっはッは！！！」

はやて「いや、あんたが殺したんゃ」

警備員「だ、誰だッ！？」

警備員が後ろを振り向くと、
そこには、はやて　とヴィータと
映司が立っていた！

はやて「遂に見つけたで！連続殺人事件の容疑者として、あんたを逮捕します！」

はやての関西混じりの声が、その場に響きわたった！

警備員「俺が殺人？ははッ！殺したのは俺じゃない！あの化け物だ！」

ヴィータ「ふざけんじゃねぇ！お前の欲望が、何も罪のない魔導師を殺したんだ！！」

警備員「さっきからゴチャゴチャと！おい、化け物！出てこい！！」

シュタッ！
その場にいきなりヤミーが現れた！

警備員「化け物！そいつらをやっちまえ！！」

ヤミーが戦闘体制に入る！

映司「やっぱり、こういう展開になるんだね」

はやて「ヴィータ、映司くん、いくでぇッ！」

ヴィータ「おう！はやて！」

映司「うん！」

映司はオーズドライバーを腰に巻き付け、
メダルをセットし、はやて　とヴィータは
デバイスを取り出す！

はやて・ヴィータ「セット、アップ！！！」
映司「変身ッ！！」

『ｓｔａｎｄｂｙ　Ｒａｄｙ』
『タカ！　トラ！　バッタ！
タッ！トッ！バッ！タトバ！タッ！トッ！バッ！！』

はやて　とヴィータは騎手甲冑を身に付け、
映司はオーズへと変身した。

オーズ「いくぞ！ハッ！セイヤッ！」

オーズはヤミーにトラクローで引き裂き、
ヤミーが苦しんだところに…

ヴィータ「はぁぁぁッ！」

ドゴォォッ！

ヴィータのグラーフアイゼンがヒットする！

ヤミー『グァァァッ！！』

オーズ（すごいな、パワーだったらゴリラアームぐらいあるな…）

ズガガガガガッ！

そこから　はやて　の複数の魔法弾がヤミーに当たる！

はやて「どや？なのはちゃんお得意の『アクセル・シューターの威力は！？』」

オーズ「凄いよ、はやてちゃん！よし、俺も負けてられないな！」

オーズはバッタレッグでヤミーを複数回蹴りつける！

ドゴォォッ！

ヤミー『ガァァッ！』

ヴィータ「これでお前も、おしまいだな！警備員！！」

警備員「く、くそぉ！おい、化け物！何をしてでも奴らを殺せ！」

その時、ヤミーの動きが止まる。

ヤミー『なにをしてでも…いいんだな？』

警備員「ああ！とにかく奴らを殺すんだぁ！」

ヤミー『それでは…』

ヤミーが警備員に寄り…

オーズ「…ッな！？」

ヤミー『お前の力を、よこせ！！！』

ヤミーは警備員を補食し始める…

警備員「や、やめろぉッ！お、俺は…ただ、魔導師に、なり、たく…ギャアァァッ！！！」

バキバキ、ゴキ…

ヤミー『ふう、ごちそうさま』

はやて「自分の親を…これがヤミー！！！」

ヴィータ「許せねぇ！！くらえ！！！」

ヴィータが再びグラーフアイゼンで殴りかかるが…

ガシィッ！

ヴィータ「なにッ！うわぁッ！！」

ヤミーは前よりパワーアップし、グラーフアイゼンを受け止め、ヴィータは自分に叩きつけられた。

はやて「ヴィータ！！！」

『タカ！　ゴリラ！　バッタ！』

オーズ「うぉぉぉッ！」

オーズはタカゴリバに亜種チェンジし、ヤミーに殴りかかるが…

ヤミー『ふん、効かんな…』

オーズ「うそ！？ぐわぁッ！」

オーズはヤミーに投げ飛ばされ、壁に叩きつけられた。

ヤミー『ここじゃ流石にキツイ、場所を変えよう。』

そう言って、ヤミーは外に飛び出していった。

はやて「まて！逃がせへん！」

ヴィータ「くそ、待ちやがれ！」

二人は飛行魔法を使い、飛び出していくが、

オーズ「わぁぁッ！？ちょっと皆まってぇ！！」

オーズはただ1人走って追いかけていた。

オーズ「はぁ…、はぁ…、チーターのメダルかクジャクのメダルあればいいんだけどなぁ」

しかし走っていると、駐車場の入口付近に…

オーズ「はぁ…、…ん？、ッあああぁッ！！！」

なんとそこには、あの自販機、『ライドベンダー』があった！！！

オーズ「なんでミッドチルダに！？もしかしてディケイドさんかな！？まあいいや！使わしていただきます！」

セルメダルを投入し、真ん中のスイッチを押して、バイクモードに変形させた！

オーズ「よし、決着を着けてやる！」

オーズはアクセルを握り、猛スピードをだして、ヤミーを追いかけていった…。

００６話　決着と解決と消えない欲望

ヤミーは地上本部から少し離れた海岸沿いにいた。

それを追いかけてきた　はやて　とヴィータも今、到着した。

はやて「さぁ、いくでぇ、ヤミー！」

ヤミー『ふん！お前みたいな小娘に、なにが…』

ドゴォォォンッ！！！

しかし次の瞬間！高濃度の魔力砲がヤミーに直撃した！！

ヤミー『グワァァァッ！！！…こ、小娘ぇぇぇ！！！』

はやて「私はな、この世界ではちょっとは名の知れた魔導師なんぉ！さあ、どんどんいくでぇ！！！」

はやて　は、シュベルトクロイツに魔力を収束する！！！

キィィィィィィンッ！！

ヴィータ「はやて！その技って！！」

はやて「ディバイィィンッ！！」

ヤミー『ッ！？』

シュベルトクロイツから収束砲が発射される！！
はやて「バスターァァッ！！！」
ドゴォォォォンッッ！！！
ヤミー『ギャァァァァァァッッ…！！！！！！！』
ヤミーは数十メートル吹っ飛んだ！
ヴィータ「すげぇや！はやて！ヤミーを吹っ飛ばした！！」
はやて「よし、これで少しは…『ズバッ！』ッ！？」
次の瞬間、ヤミーがはやての左手を爪で引っ掻いていた。
はやて「くッ！うぅ…」
ヴィータ「はやて！」
だがヤミーも虫の息だった。
ヤミー『はぁ…、はぁ…、流石にさっきのは効いたぞ、小娘、ぶっ殺してやる！』
ヴィータ（くそ、いざとなったら本気で…ッ！？）
ヴォォォォォン！
遠くからバイクの音が響き、

『タカ！　トラ！　バッタ！
タッ！トッ！バッ！タトバ！タッ！トッ！バッ！！』
やって来たのは再びタトバコンボにコンボチェンジしたオーズだった！
ヤミー『グワァァァッ！』
オーズはライドベンダーでヤミーに体当たりし、そのまま　はやてとヴィータのもとへ向かった。
オーズ「はぁ～やっと追い付いた、って、はやてちゃん！大丈夫！？」
はやて「うん、大丈夫、問題あらへ…ッく！」
左手からは血が流れ続けていた。
ヴィータ「まってろ！はやて！今シャマルを呼ぶから！」
オーズ「大丈夫、落ち着いて、はやてちゃん、ヴィータちゃん、二人とも俺が絶対守るから！」
オーズは再びライドベンダーに乗り、ヤミーに突っ込んでいく！
はやて・ヴィータ「映司（くん）…」
ヤミー『くそぉぉッ！オーズゥゥッ！！』

オーズ「くらえぇぇぇッ！！！」

オーズはライドベンダーを飛び降りそのままヤミーにぶつける。

ヤミー『はぁ…はぁ…くそぉぉッ！！！！！』

そしてオーズはオースキャナーで、再スキャナンする！

『スキャニングチャージ！！！』

オーズ「はぁァァァァァッ！！」

ヤミー『ッ！？』

オーズの『タトバキック』が炸裂する！

オーズ『セイヤァァァァァッ！！！！』

ヤミー『グワァァァァッ！！！』

ドゴォォォォンッ！！！

ヤミーは大爆発し、大量のセルメダルが飛び散る！

オーズ「はぁ…、はぁ…、は、始めてこの技きまったかも…」

数時間後…

その後、管理局局員が集まり、事件の後始末をしていた。はやてはシャマルにより治癒魔法をかけられており、ヴィータと映司は夕陽が映る海辺を歩いていた。

ヴィータ「なあ、映司」

映司「ん？何？」

ヴィータ「映司は、こんな事件沢山みてきたのか？」

映司「…うん、数え切れないほど、ね」

ヴィータ「欲望って、無くならないもんなのかなぁ…」

映司「残念だけど、それは無理なんだよ、欲望っていうのは生きる者全てに存在するからね、…でも欲望があることは悪いことばかりじゃないんだよ」

ヴィータ「？」

映司「人は欲望によって成長したり、学習したりしていける生き者なんだ、そこから過ちに気付くこともできるし、生き甲斐を見つけ出すことだってできる」

ヴィータ「…そっか、お前もたまには良いこと言うじゃねぇか！」

映司「ちょっとぉ！それどういう意味なんだよ！？」

ヴィータ「さ、はやく　はやてのとこ、帰ろうぜ！！」

映司「うん、そうだね！行こう！ヴィータちゃん！」

ヴィータ「だから、ヴィータ『ちゃん』はよせ！」

映司とヴィータは治癒を受けている　はやて　のもとへと帰っていった…。

００６話　決着と解決と消えない欲望（後書き）

とりあえず一段落、最後うまくかけなかったなぁ。

００７話　蒼狼とおでんと犬の怪物

―ミッドチルダ某所―

そこには周りとの実力の壁に当たっていた、一人のマラソン選手がいた。

選手「くそッ、もうすぐ大会だっていうのに…、俺はノロマだ…せめて、もっと速くはしれる足だったら！」

???「その欲望…俺が叶えてやる…」

選手「な、なんだ！？」

次の瞬間、マラソン選手の目の前にあの『謎のグリード』が現れた。

選手「あ、あ…」

???「ふん、面白い欲望だ、楽しみだな」

謎のグリードはマラソン選手にセルメダルを投入する、すると、マラソン選手から一体の犬の形をしたヤミーが現れた。

選手「な、なんなんだ、こいつ！？」

???「そいつは、お前の欲望を叶えてくれる、さぁ、解放してみろ！お前の、欲望を！！！！」

選手「ッ！……お、俺は…ッ！」

―機動６課―

映司「フェ、フェイトさんッ！」

フェイト「なに？映司？」

映司「き、今日は、良い天気ですねぇ！」

フェイト「うん、そうだね♪」

仮面ライダーオーズこと、火野　映司は、フェイトと仲良くなりたいがため、色々と格闘していた。

映司「フェイトさん！もし良かったら午後からお、お茶でも

『あ、いたいた～』ッ！？」

突然はやてが横からわりこんできた。

はやて「映司くん、悪いけどヤミーについてちょっと聞きたいことあるからちょっとついて来てほしいんよ、あ、フェイトちゃん！ち

ょっと映司くん借りていくなぁ！」

フェイト「うん、いいよ！」

はやて「ほな、いくで！映司くん！」

映司「え！？ちょっと！わぁ、あああぁッ！！」

数十分後…

映司「うぅ…ひどいよ、はやてちゃん」

はやて「あははッ！！悪かったなぁ映司くん！でも嬉しいぁ、皆と仲良くなってもらって！」

映司はミッドチルダに来て、まだ日は浅いが、そのお人好しな性格のおかげで、機動６課のほとんどの人と仲良くなっていた。ただ、一人を除いて…

映司と　はやて　が一緒に廊下を歩いていると、前からヴォルケンリッターの１人、『ザフィーラ』が、歩いてきた。

映司「あ、ザフィーラさん、こんにちは！」

ザフィーラ「…あぁ…。」

チラッと見たと思えば、一言だけ言ってそのまま歩いて行ってしまった。

映司「ザフィーラさん、やっぱり俺のこと、あまり良く思ってないのかなぁ」

はやて「う～ん、ザフィーラは少し特殊やからなぁ…（あかん！このままじゃいつまでたっても関係は良くならへん！ここは私が一皮むかんとなぁ！）」

―ブリーフィングルーム―

いつも通り、はやて、映司、ヴォルケンリッター達で、定期会議をしていると、はやてが定期パトロールのメンバー交代をすると言い出した。

ヴィータ「なんだよ、別に私とシグナムで良いじゃねぇか」

はやて「だめや、たまには違うメンバーにでもしてみよか！」

シグナム「まあ、主はやて　がそう言うのなら…（まずい、あの主の顔は何か企んでいる…）」

シャマル「それで、メンバーって誰なの？はやてちゃん」

はやて「えっと、これから数日は　映司くん　と　ザフィーラ　の二人に任せるぉ！」

ザフィーラ「…ッ！？」

映司「え、ザフィーラさんと？」

はやて「ほな、そういうことで、お願いなぁ！」

…1日目

ザフィーラ「……。」

映司「……。」

かなり気まずい空気が流れていた。

映司「…。（まずい、なにか喋らないと！）」

映司は重い口を開いた。

映司「ざ、ザフィーラさん」

ザフィーラ「何だ？」

映司「きょ、今日は良い天気ですね～」

ザフィーラ「…曇りで太陽など見えないが」

映司「な！？あ、ホントだ！あはは～…」

ザフィーラ「…。」

…2日目

映司「…。（今日こそは！）」

ザフィーラ「火野。」

映司「はいッ！？」

ザフィーラ「私はこっちを巡回する、火野はそっちを頼む」

映司「は、はい…。」

…3日目

パトロールが終わった後の帰り道にて…

映司（はぁ、今日もあまり話せなかった…ん？あれって！）

映司「ザフィーラさん！！」

ザフィーラ「なんだ？」

映司「おでん、食べてきましょ！」

ザフィーラ「…？」

ーおでん屋台にてー

映司「いや～ミッドにまさか屋台があるなんて、ザフィーラさん、おでん食べたことあります？」

ザフィーラ「あぁ、主が作ってくれた物ならな」

映司「何食べよっかな～、とりあえず、大根と、磯巾着と、…ザフィーラさんは？」

ザフィーラ「…人参と、卵を頼む」

映司「はいは～い♪」

その後、不思議なことに何の抵抗もなく、お互いのことを話していた。ザフィーラは基本無表情だったが、前と比べて自分から良く映司に話しかけてきてくれた。

映司（もしかして…ザフィーラさんってただ単にコミュニケーションが下手なだけで、基本良い人なのかな？）

一時間程度屋台にいた後、二人で帰っていた。

映司「いや～美味しかったですね、ザフィーラさん！」

ザフィーラ「あぁ、久々に楽しかったぞ、礼を言う、火野…ッ！」

その時、ザフィーラが何かを察した！

映司「どうしたんですか？ッ！？」

映司もある気配を察した！

次の瞬間、ザフィーラに対してヤミーが襲ってきた！

ザフィーラ「っ！！」

ザフィーラはなんとか攻撃をかわした。

ヤミーが体制を立て直す。

ヤミー『よこせ、…お前の、速さを！！！』

ザフィーラ「お前がヤミーか、悪いがすぐに終わらしてやる」

映司はあわててオーズドライバーを腰に巻き、メダルをセットし、スキャンする！

映司「変身ッ！！」

『タカ！　　トラ！　　バッタ！

タッ！トッ！バッ！タトバ！タッ！トッ！バッ！！』

映司はオーズに変身した！

オーズ「いくぞ！ハッ…て、あれ？」

ヤミーに対してトラクローで攻撃したが
とんでもない速度でかわされた。

オーズ「は、速すぎて攻撃があたらない～！」

ヤミー「オーズ、お前の力はその程度か」

ザフィーラ「俺を忘れてないか？」

ドガァッ！
ヤミー『ッ！？ギャァァァッ！』

ザフィーラの高速の拳がヤミーにヒットした！

ヤミー『俺より速い！？クソッ！！』
ザフィーラ「…遅い！」

ドガガガッ！！
ザフィーラの連続攻撃が次々とヒットした！

オーズ「凄いや…ザフィーラさんってこんなに強かったんだ！！！」

ヤミー『だ、ダメだ、一回退散だ！！！』

ヤミーはそのまま逃げてしまった。

ザフィーラ「逃げ足なら、俺より早いみたいだな」

オーズは変身を解き、ザフィーラに駆け寄った。

映司「大丈夫ですか？ザフィーラさん？」

ザフィーラ「ああ、火野は大丈夫か？」

映司「はい！」

ザフィーラ「…火野、少し良いか？」

ザフィーラは突然深刻そうな顔をして、映司に質問した。

映司「な、なんですか？」

ザフィーラ「今まで生活してきて、お前から普通の人間から感じられない違和感を感じていたのだが…今、火野がオーズに変身して今まで感じていた違和感がわかったのだ、その違和感は今出現したヤミーの感じに非常に、良く似ていた…」

映司「ッ！？」

ザフィーラ「火野、お前…

本当に純粋な、『人間』なのか？」

００７話　蒼狼とおでんと犬の怪物（後書き）

活動報告に、『補足説明』を載せました。

００８話　正体と追跡とラトラーター

ザフィーラ「火野、お前は本当に純粋な、

『人間』なのか？」

映司は身体中の血の気が一気に引いた。

映司「な、なに言ってるんですか？ザフィーラさん」

ザフィーラ「とぼけるな、火野」

映司「ッ！？」

ザフィーラ「主や他の者達は感じられない『気』を私は感じることができる、…頼む、場合によっては、私は火野を拘束しなくてはいけない。私もそんなことは、…したくはない…。」

めったに表情を表さないザフィーラが、悲しげな顔をして、映司に問いただした。

少し時間がたち、映司は口を開いた。

映司「…わかりました。すべて話します。…俺の、身体のこと…。」

映司とザフィーラは、そのまま近くにあった公園に移動した。

映司「…ザフィーラさん、口で説明するより、直接見せたほうが早いので、その…見てて下さい。」

ザフィーラ「?、ああ…。」

映司「…、ハァァッ！」

ザフィーラ「ッ！?」

チャリリリリリリリンッ！

次の瞬間、映司の身体はオーズの時とはまた違った、異形の怪人の姿に変化した。

…そう、かつて『紫のメダル』の力でなってしまった、『グリード体』である。

ザフィーラ「…、なぁッ！?」

流石にザフィーラは驚きを隠せなかった。

映司グリード『これが、俺の正体です、…俺は、人間じゃ…ないんです』

…映司はザフィーラに全て話した。

映司は以前、ドクター真木との闘いで、コアメダルを身体に入れられてしまい、人間からグリードにさせられてしまった。そのため、映司は一時期、人間にある『五感』の機能がほぼ全て無くなってしまった。

だが、最終決戦にて、映司の体にあった『紫のメダル』は取り除かれ、時間がたつにつれて、五感の機能が少しずつ回復していった。

…しかし、グリードへの変身機能と、『味覚』と『色彩認識能力』は治ることは、なかったのだ…。

映司は人間体に戻っていた。

映司「今の俺は、『人間』でもなく『グリード』でもない存在…、今まで黙っていてすいませんでした…、でも！別に騙す気は…」

次の瞬間！ザフィーラは映司の胸ぐらを掴み、激怒した！！

ザフィーラ「この大馬鹿者ぉッ！！！なぜッ…なぜ今までそのような大事なことを黙っていたぁッ！！！！！」

映司は突然のことに、言葉もでなかった。

ザフィーラ「なぜ全て1人で抱え込むッ！！お前は我らがそこまで頼りなく見えるのかッ！！我らはッ！我らはッ！！

『仲間』であろうがぁッ！！！！！」

映司「ッ！！！！！！！！！！」

ザフィーラは優しく、映司の胸ぐらを離した。

ザフィーラ「火野、お前は1人ではない、お前の周りにはもう、シグナムやヴィータ、シャマルと、機動6課の人達に、…『我が主』がいるだろう、なにをそんなに、怖がっているのだ…？」

映司「…あ、あぁ…」

そのとたん、映司は膝をついて、泣き出してしまった…。

映司「おれぇ…怖かったんです…ヒグッ…また…何かを…グスッ…失う…気がして…う、うぁぁぁぁぁッ！！！！！」

ザフィーラは膝をつき、映司の肩を優しく叩き、笑顔で映司を泣き

止ました。

数分後…

映司とザフィーラは、再び機動６課に向けて歩いていた。

映司「すいません、ザフィーラさん、さっきは…その…」

ザフィーラ「別に気にするな、火野」

映司「はい…それでなんですけど、ザフィーラさん…俺の身体のこと、もう少し皆に黙っていてくれませんか？」

ザフィーラ「…！？火野！これ以上　主　達を『わかっています！！』ッ！？」

映司「いずれ、その時がきたら、はやてちゃん達に、全て話すつもりです。それまで、お願いします！！」

映司はザフィーラに対して、深く頭を下げた。

ザフィーラ「…わかった、お前を信じよう、…さて、さっきのヤミーの件を急いで報告しなくては、いくぞ！火野！！」

映司「はい！ザフィーラさん！！」

映司（伊達さんや後藤さん、比奈ちゃんに言われたこと、また言われたなぁ…、俺も、もっと成長しなくちゃッ！！）

―ブリーフィングルーム―

はやて「なるほどな、今回は犬型のヤミーが表れて、ザフィーラを襲ってきたんか、けど変や、別に傷害事件の報告なんてきてへんなぁ」

映司「ヤミーは、『その速さをよこせ』って言っていたんだ、…もしかして人間じゃなくて、『別な何か』を襲っているんじゃないのかなぁ？」

はやて「う～ん、…そや！リィン！」

リィン「なんですか？はやてちゃん！」

はやて「管理局のデータベースから最近起こった変わった事件を検索してな！」

リィン「時間かかっちゃうけど、頑張るですぅ！」

シグナム「リィンフォース、私も手伝うぞ」

ヴィータ「映司とザフィーラのおかげで十分休めたし、体力はＭＡＸだぜ！」

検索作業は翌朝まで続いたが、特に目立った事件は見当たらず、捜査は難航していた。

しかし、事件は起きた！

フェイト「キャアァァァァァァッ！！！！！！！」

はやて「な、なんや！！？」

映司「フェイトさんんんッ！？！？」

映司は一目散にフェイトの声がした所へ向かった。

はやて「こういう時だけ行動はやいんゃなぁ…。」

ー機動６課　玄関前ー

フェイト「あ、あぁ…！」

映司「どうしたんですか！？フェイトさんッ！？…ッ！？！？」

そこには、無残にエンジン部分を食い尽くされた、フェイトの車があった。

フェイト「ローンがあと数年あるのに…はは…ハハハハッ！！」

壊れかけているフェイトとは裏腹に、映司は真剣な目で車をみていた。

その場には　はやて　と　ザフィーラも来ていた。

映司「これは間違いない…ヤミーの仕業だ！」

はやて「そうか、ヤミーは人間を襲っていたんじゃなく、車のエンジンを奪ってたんか！」

その時、ザフィーラは狼の姿に変わり、すかさず車の食べられた跡を必死に『匂い』を嗅いでいた。

映司「ザフィーラさん、何を！？」

ザフィーラ「火野、ヤミーの『匂い』がわかった！消える前に急いで追いかけるぞ！」

映司「えぇ！？わかるんですか！？ま、まあいいや！いきましょう！」

映司はライドベンダーに乗り、ザフィーラと共に、ヤミーの跡を追いかけていった！

はやて「たのんだなぁ～ザフィーラ～映司く～ん！」

フェイト「うう、はやてぇ～」

はやて「はいはい、フェイトちゃん、はよなきやんでなぁ」

―ミッドチルダ市街地―

そこにはとんでもない速度で走る狼の姿になったザフィーラと、ライドベンダーに乗った映司がいた！

ザフィーラ「火野！近いぞ！」

映司「はいッ！…あれ？ここは…」

たどり着いたのは、とある総合体育館だった。

ザフィーラは匂いをたどっていくと、男性更衣室にたどり着いた、そこには1人の青年と、…あのヤミーがいた。

選手「やめてくれ！他人に迷惑をかけてまで俺は速くなりたくない！」

ヤミー『何をいっている、お前は　この世で一番速くなりたい、と願ったではないか』

ヤミーは捕食したエンジンをパワーに変換し、マラソン選手の足に送っている。

選手「嫌だッ！助けてくれぇ！」

マラソン選手はヤミーから逃げる。

ヤミー『逃がすものか！』

ヤミーもすかさず選手を追いかける。

映司「ザフィーラさんッ！」

ザフィーラ「ああ、追いかけるぞ！」

…マラソン選手は外にある競技場まで逃げていた。

選手「こ、ここまでくれば…」

ヤミー「逃げられると思っていたのか？」

選手「うわぁぁッ！」

ヤミーはマラソン選手のすぐそばに立っていた。

選手「い、いやだ、誰か、誰かッ！誰か助けてくれぇぇぇッ！！！」

その時！

映司＆amp;ザフィーラ「てぉぉぉいッ！！」

ドガァッ！！

ヤミー『ギャァぁッ！だ、誰だぁ！？』
二人のダブルキックがヤミーに決まった！
映司「大丈夫ですか？早く逃げてください！」
選手「あ、ありがとうございます！」
マラソン選手は逃げていった。
ヤミー『ははッ！そこの狼男！お前の足は車のエンジンより速く走れるようだな！ほしい、お前の足がほしいいいッ！！！』
ザフィーラ「誰がお前なんぞにやるものか」
映司「いきましょう、ザフィーラさん！」
映司はオーズドライバーを腰に巻き、メダルをセットして、スキャンする！
映司「変身ッ！！」
『タカ！　　トラ！　　バッタ！
タッ！トッ！バッ！タトバ！タッ！トッ！バッ！！』
映司はオーズに変身した！
ザフィーラも構え直す！
オーズ「くらえッ！セイヤッ！！」
しかし、ヤミーはオーズの攻撃を簡単にかわす！

オーズ「ま、前より速くなってる！」

ザフィーラ「ッく！　ハッ！」

ザフィーラの攻撃がヤミーにヒットするが…

ヤミー『…ハハハハッ！！』

ザフィーラ「ッ！？グハァッ！！！」

ザフィーラはヤミーのカウンターをくらい、膝をついてしまう。

ヤミー『これで、終わりだぁ！』

ヤミーがザフィーラに迫ってくる！

ズババババッ！

ザフィーラ「ッ！？」

狼「ぐあァァッ！」

なんとオーズがザフィーラを庇い、ヤミーの連続攻撃を受けてしまった！

ザフィーラ「火野、なぜ！？」

オーズはフラフラになりながら、ザフィーラに振り向く。

オーズ「ははッ、攻撃が出来ないなら…守るしかないかなって思って…ッく！」

ヤミー『バカなやつだ、安心しろ！2人とも一緒に殺してやる！』

ザフィーラ「本当にバカな男だ…だが、嫌いではない」

ザフィーラはオーズの前に立つ。

ザフィーラ「安心しろ、火野。こんな奴、俺1人で大丈夫だ」

しかし、ザフィーラも既にボロボロだった。

オーズ（くそ…俺にもっと力があれば…！）

『久しぶりにきいたな、お前の欲望』

オーズ「ッ！？今の声！？」

再び、オーズに謎の声が届いた！

『映司ぃ！そいつには、このメダルだ！』

空から二枚の『コアメダル』が落ちてきた！

パシッ！

オーズはそれをキャッチする！

オーズ「『ライオン』のメダルと『チーター』のメダル！これならッ！！！」

オーズはザフィーラの目の前に立ち…

ザフィーラ「火野？」

メダルをチェンジし…

オーズ「大丈夫です、ザフィーラさん。俺がザフィーラさんを守ります！」

スキャンするッ！

キンッキンッキィィィンッ！！

『ライオン！トラ！チーター！

ラッタ！ラッタァ！ラト！ラーター！！』

オーズ「うぉぉぉぉぉぉぉぉッ！！」

オーズのライオディアスが炸裂する！

ヤミー『ギャァぁッ！』

ザフィーラ（なんだ！？このパワーは？今までとは段違いだ！！）

オーズ「はぁぁッ！！」

そこに立っていたのは…

『黄色』のオーズ、
『ラトラーターコンボ』ッ！！！！！

００８話　正体と追跡とラトラーター（後書き）

長くなりました。つぎの話で『ザフィーラ編』は、おしまいです。

００９話　神速と現れたら闇といつか聞いた『声』

ミッドチルダ上空、１人の魔導師が飛んでいた。

はやて「飛行許可取るのにえらい時間かかってしもた、映司くんとザフィーラ大丈夫かなぁ？」

機動六課部隊長、八神はやては映司とザフィーラが向かったと思われる場所に急いで向かっていた。

その時、隊舎にいたリィンから、突然連絡が入ってきた。

リィン『はやてちゃん！聴こえますか！？』

はやて「ああ、聴こえるで、リィン。どないした？」

リィン『今、映司さんとザフィーラが交戦している場所からとんでもないエネルギーを感知たです！』

はやて「なんやて！？」

リィン『あと…さっきから正体不明のエネルギー現がその交戦場所に向かっているのが探知されてるです…そのエネルギー現のパワーは、今、映司さん達のいる場所から出ているエネルギーと同等か、それ以上なんです…気をつけて下さい！はやてちゃん！！』

はやて「わかった、ありがとな、リィン！（正体不明のエネルギー現…なんか、嫌な予感しかせぇへんな…）」

はやては更に速度を上げ、オーズ達が交戦している場所へと向かっ

た…。

―競技場―

オーズは全身黄色に変わり、頭はまるで『ライオン』を催した形に、胸には『トラ』の紋章が浮かび、足は『チーター』の形状をしたものになり、オーズのコンボの一つ、『ラトラーターコンボ』にコンボチェンジした！！

オーズは犬の形をしたヤミーに対して構えた。

ザフィーラ（この力は一体！？最初にみた赤黄緑の上下三色の形態の時より、かなり『気』が上がっている！これが、…オーズの本当の力なのか！？）

オーズ「ッはぁッ！！」

次の瞬間！オーズはザフィーラでさえ認識できない速度で、犬型ヤミーの体のあちこちをパワーアップしたトラクローで切り刻んでいた！

犬型ヤミー『ギャァぁッ！！！』

犬型ヤミーは身体中からメダルを吹き出し、悶え苦しんでいた。

現在オーズがメダルチェンジしているチーターレッグには、オーズの脚力によるスピードを最大限に上げる能力を持つ、さらにコンボになることにより、その力を数倍に上げ、究極の『速さ』を手にすることが、できるのだ！！

ザフィーラ「さあ、いくぞ、火野！」
オーズ「はい！」
そこから更にザフィーラのパンチとキックのコンボ技、オーズのトラクローによる高速の斬撃が決まる！
犬型ヤミー『グハァッ！…はぁ…はぁ…』
ヤミーに隙ができ…
オーズ「次で決めましょう！ザフィーラさん！」
ザフィーラ「ああ！」
ザフィーラは空へ高く跳び、
オーズはオースキャナーでスキャンする！
『スキャニングチャージ！！』
オーズ「セイヤぁぁぁぁぁッ！！！！！」
ザフィーラ「ておぉぉぉいッ！！！！！」
そのままオーズは頭のライオディアスを輝かせ、トラクローで切り刻むラトラーターコンボの必殺技『ガッシュクロス』を発動し、犬型ヤミーを切り刻む！！！！
ザフィーラは急降下キックをヤミーに食らわした！！！！
犬型ヤミー『ギャァぁぁぁぁぁッ！！！！』

犬型ヤミーはそのまま爆発し、辺りには大量のセルメダルを撒き散らした！

オーズ「はぁ…はぁ…やりましたね、ザフィーラさん！」

ザフィーラ「あぁ、やったな！火野！」

オーズとザフィーラは軽く拳と拳をぶつけ合った。
これでこの事件は終わるかと思っていた、
だが…

オーズ・ザフィーラ「ッ！？」

オーズとザフィーラはその場に近づく強大な力を感じた。『それ』は、少しずつこちらへと、近づいてきた！

オーズ「この感じ…もしかして」

オーズとザフィーラは構え直す！

そこに現れたのは…

？？？『ほう、貴様がオーズか…』

そこには、異形の怪人が現れた。しかし、今まで表れたヤミーとは違い、馬に角が生えたような頭、背中には翼があり、足にはとても

鋭利な爪が生えていた。そして、とてつもないエネルギーを出していた！！

ザフィーラ「くそ、また『ヤミー』か？」

オーズ「違います！…間違いない、こいつが

『謎のグリード』です！！」

そう、この怪物こそ、映司や　はやて　が追っていた、『謎のグリード』であった！！

謎のグリード『初めましてだな、夜天の魔導書の守護騎士、…それと、他の世界のオーズ！』

オーズ「ッ！？（他の世界？ってことは、このミッドチルダにもオーズは存在したって事？）」

ザフィーラ「ッく！？…何をしにきた！？」

謎のグリード『なに…ただ俺は奪われた物を取り返しにきただけだ…さあ、…返して貰おうかッ！！！！』

次の瞬間！謎のグリードはザフィーラに目掛けて攻撃してきた！

オーズ「ッ！！速い！だけど！」

オーズはギリギリのところで謎のグリードの攻撃からザフィーラを護った。

謎のグリード『ほう、ラトラーターコンボをそこまで使いこなすとは、…しかし！』

そうグリードが話したとたん、オーズとザフィーラの周りの『重力』が一気に増加した！

ザフィーラ「ッなに！？」

オーズ「うそでしょ！？これって…『ガメル』の能力じゃ！？」

そして謎のグリードは…

ズシュッ！

ザフィーラ「ぐぁッ…！？」

オーズ「…ざ、ザフィーラさんッ！！！」

謎のグリードは…

ザフィーラの胸を貫いた…

その手には、ある「光る物」が握られていた…。

映司「ザフィーラさんッ！」

映司は重力攻撃から脱出し、ザフィーラの元へと駆け寄った、だが

ザフィーラは…

ザフィーラ「な、なんだ？痛みを感じないぞ？」

オーズ「えぇ？」

ザフィーラは全くの無傷だった。それを見ていた謎のグリードは高らかに笑った。

謎のグリード『はっはッは！だから言っただろう、ただ、返してもらうと！…あと４つ、あと４つだ！』

オーズ・ザフィーラ「ッく！」

謎のグリード『…だが、これ以上邪魔されるのも面倒だ、ここで二人とも死ね！』

再びオーズとザフィーラに、重力攻撃が迫る！

オーズ「ッくそ！」

ザフィーラ「む、無念…」

その時、空から高濃度の魔力砲が、グリード目掛けて降り注がれた！

謎のグリード『ぐぁッ！だ、誰だ！？』

そこには、やっと到着した八神はやて　の姿があった！オーズとザフィーラは重力攻撃から解放され、はやて　は二人の前に降り立ち、シュベルトクロイツを構えた！

はやて「それ以上やるんやったら、今度は私が相手や！」

オーズ「あ、ありがとうはやてちゃん、気をつけて！そいつがグリードだよ！」

はやて「なんやて！？」

そのとたん、グリードは　はやて　を凝視した！…そしてグリードは口を開いた…。

謎のグリード『お前が現在の夜天の魔導書の持ち主か…そうか、くっくっく…俺はついてる！俺の復活は近いようだな、あっはっは！！』

はやて「な、なんや、…気持ち悪いなぁ、私が本気になれば、ここであんたをふっ飛ばすこともできるんやでぇ！」

グリードは笑いを止め、両手を上げた。

謎のグリード『いやいや、今はやめておこう！まだ、俺の力もあまり戻っていないしな…しかし、時がくれば、その　夜天の魔導書に封印された、　６６７ページ　の物を　返して貰おう！』

はやて「な！？６６７ページ！？なんや、それ！？」

謎のグリード『最後に…オーズ！お前に良い事を教えてあげよう！』

オーズ「ッ！？」

謎のグリード『わが名は、アンジュ　かつてこの世界の　他のグリード　と、オーズ　を倒した者だ！』

その場に衝撃が走った！三人は驚きを隠しきれなかった！

アンジュ『去らばだッ！』

はやて「なぁッ！待て！」

しかし時は遅く、『アンジュ』という名のグリードは、いつの間に

か姿を消していた…。

その後、はやて達は、事件の後処理を行っていた。マラソン選手は、無事保護され、管理局員は事情聴取を行っていた。

映司「選手さん、大丈夫かなぁ？」

ザフィーラ「彼も悪気があったわけではない、管理局ならわかってくれるだろう。」

映司「だと良いですね…おっと…」

ザフィーラ「大丈夫か？」

映司「はい、ちょっと疲れたかな」

映司は少しふらついていた。久しぶりのコンボによる疲労と連戦により、体は限界に達していたのだ。

ザフィーラ「…火野、少し聞きたいことがあるのだか、良いか？」

映司「なんですか？」

ザフィーラ「火野はヤミーとの戦いの時と、アンジュとの戦いの時も、自分の身より、私を優先して護ってくれた。なぜそこまで他人を優先する？」

映司「他人とか、関係ないです。目の前で立ちきられそうな『命』があるのなら、ただ護りたいだけなんです。」

ザフィーラ「ッ！！！！！！」
次の瞬間、ザフィーラの頭の中で、ある『声』がよぎった。

―…ただ俺は護りたいだけなんですッ！！！！！もう、誰も失いたくないからッ！！！！！

ザフィーラ（なんだ？今の声は…遠い昔に、聞いたような…）

映司「ザフィーラさん、大丈夫ですか？」

ザフィーラ「ッ！あ、あぁ、すまない」

ザフィーラはふと、我にかえる。そして、改めて映司に断言した。

ザフィーラ「ただ、護りたいだけ、か。私も『盾の守護獣』として、見習わなくてな、感謝するぞ、火野」

映司「ッ！はい！」

映司（遂に倒すべき敵が現れたな…苦戦すると思うけど、大丈夫な気がする、だって俺の周りには、『仲間』がいるから！）

映司達の戦いは、
まだ終わらない…。

００９話　神速と現れたら闇といつか聞いた『声』（後書き）

これにてザフィーラ偏は終了です。
次は、あの『バトルマニア』との話です。

あと、活動報告にて、あとがき　と　補足説明２　を投稿しました。

１２月２８日は忘年会なので更新はしません。
すいません…（笑）

０１０話　烈火の将と過ちの騎士と師弟誕生（前書き）

今回からテコ入れを行います。
主な変更点は、

セリフ前の名前を廃止

状況の精密描写

の、２つです。

０１０話　烈火の将と過ちの騎士と師弟誕生

月の光りが微かに照らす路地裏で、２つの影が走っていた。

１人は甲冑を身につけ、その手には普通の物より少しサイズが大きい剣を持ち、桃色の髪色でポニーテールをした美しい女性で、もう１人はだるだるの服を身につけ、外はねっ気のある髪型をし、腰にはとあるベルトを巻いている少し変わった格好の青年だった。

「無線によれば次の角を右だ、急ぐぞ、火野！」

「はい、シグナムさん！」

映司達は、息を切らしつつ急いで、角を右に曲がると、その先に、まるで中世の騎士を具体化したような『ヤミー』と、そのヤミーに教われている、少し柄の悪そうな『学生』の姿があった。学生は腰を抜かし、壁に寄り付いていた。

「な、なんなんだてめぇ！？俺がなにしたっていうんだ！？」

『…。』

ヤミーは無言のまま、右手に持っていた剣を学生に向ける！

「ひっ！だ、誰か助けてくれぇ！！」

次の瞬間！ヤミーの剣が自分の頭上に上げた！そしてそのまま学生に降り下ろそうとしている！

それをシグナムが察知し、

「ッく！させん！」

風の如く、飛行魔法を巧みに使い、学生の前に移動し、ヤミーの降り下ろした剣をシグナムのアームドデバイス『レヴァンティン』でガードした！

『ッ！…邪魔だ…』

「悪いな、これが私の仕事なのでなッ！」

シグナムはそのまま後ろで腰を抜かしていた学生に、大声で叫んだ。

「今のうちだ！はやく逃げろ！」

学生は緊張がほぐれたのか、生意気げに

「わ、悪いなあんた、あばよッ！」

と、その場から逃げていった。

その後、映司がシグナムの近くまで来て、すかさず右手にオースキャナーを持ち、オーズドライバーにあるメダルをスキャンする。ドライバーにはあらかじめ「タカ」「トラ」「バッタ」のメダルがセットされていた。

「変身ッ！！」

『タカッ！トラッ！バッタッ！

タッ！トッ！バッ！タトバ！タッ！トッ！バッ！！』

映司はオーズに変身し、シグナムの横に立ち、騎士ヤミーに対して構えた。

「な、なんか強そうなヤミーですね」

「うろたえるな、いくぞ！火野！」

シグナムはそう言うと、騎士ヤミーにレヴァンティンで攻撃する、
…が、騎士ヤミーも達人並みの剣さばきで、シグナムからの攻撃を許さない！

シグナム「なかなかやるな、ッだが！」
『Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ』

シグナムはレヴァンティンの携帯の一つ、
『シュランゲフォルム』を発動した。
レヴァンティンの刀身はまるで鞭のようになり、騎士ヤミーの身体を複数回切り刻んだ！

『ッ！…。』
「今だ、セイヤッ！」

オーズはトラクローを展開し、騎士ヤミーに攻撃をしようとするが、

『…甘いな。』
「ッ！うわぁっ！」

騎士ヤミーの剣がオーズにヒットした。オーズはリーチ負けをしていた。

「ちょっとぉッ！武器つかうなんて反則でしょ！」
「なにをやっている！！」

シグナムは思わず映司に突っ込んでしまった。
その隙を騎士ヤミーが見逃す訳もなく…
『ッはぁ！』

騎士ヤミーがオーズとシグナムに向かって剣から衝撃波を放った！
「うわッ！」
「くッ！…な？しまった！」
オーズとシグナムは壁に叩きつけられた！さらにシグナムはその衝撃でレヴァンティンを手放してしまった！

『オーズ、ここで消えろ』
騎士ヤミーがオーズ目掛けて突っ込んできた！
「くそ、どうすれば…あ！」
オーズの足元には先程シグナムが手放してしまったレヴァンティンがあった。
「シグナムさん、ちょっとお借りします！」
「な、なに？」
オーズはレヴァンティンを片手で持ち、騎士ヤミーに対して、かつてメダジャリバーを扱っていたようにやみくもに振り回す！
「セイッ…て重ッ！で、でも！！」
オーズは更に騎士ヤミーに対してレヴァンティンを振り回す！すると攻撃がヒットした！
『…ッ！よ、読めん…』

それもそのはず。映司が剣の使い方など知っている訳がない。シグナムはその戦い方を…

「……。」

ただ、じっと見ていた。

「セイヤぁぁッ！」

『く、くそ…』

オーズが徐々に騎士ヤミーを押し始める！

「よし、今だッ！」

オーズはオースキャナーを持ち、レヴァンティンにスキャンする…？

「な、なにやってるんだ火野ぉ！？」

「わぁ！？メダジャリバーと間違えたぁ！」

『（今だ…！）』

その隙に騎士ヤミーは空高く跳び、逃げてしまった。

…その場の空気が、重くなる。

シグナムが一言も喋らない。

（ヤバい！シグナムさん俺がバカやったから怒ってるのかな！？）

シグナムの目が髪に隠れて余計恐ろしい…

「…し、シグナムさん、と、とりあえず、レヴァンティン返しますね！」

オーズはシグナムにレヴァンティンを返す。
すると、シグナムは…

「火野ッ！！！！！！！！！！」
急に叫びだし、熱弁を始めた！オーズは慌てて棒立ちになり返事をする！

「はいぃッ！」
「なんだ…なんださっきの剣さばきは！？オーズとあろう者が、いったいなにをしている！？」

「えぇぇッ！？（怒るとこそっち！？）」

「第一、形がなってないッ！片手で振り回せば良いとでも思っているのかッ！？この愚か者！！！！」

「愚か者！？」

「今決めたぞ！明日からフォワード達と特訓だ！そして火野、お前は私の…

弟子になれッ！！！！！！！！！」

「え、…ええぇぇッ！？」

次の日、機動六課の部隊長室ではいつもは笑顔を絶やさないが珍しく深刻な顔をした　はやて　の姿があった。

「グリード、アンジュの出現と夜天の書の隠された６６７ページ、ザフィーラの身体からでてきたリンカーコアとはまた違うエネルギー体
、グリードと夜天の書には何か繋がりがあるのか？…なぁ、『リィンフォース』、あんたは一体何を知っとるんや？…なぁ…。」

はやては『夜天の書』を見つめ、悲しげな顔をする。

だが、そんな空気も『あの男』が一瞬で壊してくれた。

『はやてちゃぁぁぁぁんッ！！！』

「な、なんや！？」

突然映司がノックすらせず、部隊長室に入ってきた！

「な、どうしたんや、映司くん！」

はやて　は酷く怯えている映司の様子をみて、少し焦っていた。その姿はまるで、鬼から逃げている子供のようだった。

「シグナムさんの特訓がおかしいんだよ！準備運動でマラソン１０ｋｍって何！？」

はやて　は、あぁ、という顔をし、優しく映司の肩を叩いてあげた。

「映司くん、がんばってなぁ」

「え、何！？もっと過酷な事でもあるの！？」

「みつけたぞ！火野！」
「ッ！！」
そこには仁王立ちしているシグナムの姿があった。近くにいるだけでも『熱い』。
「さあ、走るぞ！大丈夫だ、私も走る！」
「ちょ、ちょっと待…」
「さあ、いくぞ！」
「嫌だぁああッ！！！！」
シグナムは映司の首下を引っ張り、無理矢理連れていった…

「なんやろな…なんか、…なんやろ？」
微妙な心境のはやて　だった。

「はぁ…はぁ…ホントに…ゲホッ…走った…」
「久しぶりに良い汗をかいた、ふぅ～風が涼しい」

蔓延の笑顔をしているシグナムとは対象に、今にも死にそうな映司の姿があった…。

「さて、今日から特訓を始めるわけだが、火野…」

「は、はい？」

映司が答えると、シグナムはとんでもない事を言い出した！

「これから特訓が終わるまで、『オーズドライバー』と『コアメダル』全てを預からして貰おう」

「……え、…え？

えええええええッ！？！？！？

映司の地獄の特訓が、始まった…。

０１１話　特訓と本当の『強さ』とガタキリバ

あれから数日、機動六課の訓練スペースでは、スターズの隊長である高町なのは　と、その部下である、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、そして１人の『青年』が訓練を行っていた。

「さあ、後一分、私の『ディバイン・シューター』からにげきってね！」

『はいッ！』

現在、三人はなのはの魔法弾から指定時間逃げつづける回避訓練を行っていた。
スバルとティアナは今までの訓練と実戦の積み重ねにより、決して楽ではない　なのは　の訓練をこなしていた。ただ、映司は…

「うわぁッ！あ、危な、ちょ、ぎゃあ！」

ギリギリのところで回避したり、たまに一弾あたる…等、とても見ていられるものではなかった。

「映司く～ん…大丈夫？」

なのは　は心配そうに、映司に近寄る。

「だ、大丈夫…です。」

映司はうつ伏せになりながら右手を上にあげ、ピースサインをだした。

「そうか、なら次の私との訓練も問題ないな！」
「あ、シグナム副隊長」
「えぇッ！？」

いつのまにか、なのは　の隣にはシグナムの姿があった。映司は驚き、うつ伏せの状態から急いで正座になる。

「さあ、火野！ついてこい！」
「ま、待ってください、ちょっと、疲れて…」
「何を言っている！さあ、いくぞ！」

シグナムが映司の手を握り、ほぼ強制的に連れていかれてしまった。

「ま、待って！あああぁぁ……。」

「なのはさん…」
「なに？スバル」
「シグナム副隊長と映司さん見てると…ッぷ！くふふ…なんか面白いです！」
「こ、こらスバル！…ふふっ…でも、なんだか二人を見てると、夫婦漫才みたい！…あはははは！！」
「な、なのはさん笑いすぎ、あはははは！！！」

「なのはさんとスバル、なんであんなに笑ってるんだろう？」

「さあ火野、これを持て！」
「これは？」

シグナムから渡されたのは、何か特殊な加工を施された物でもなく、ただの「木刀」だった。

シグナムは木刀を両手で持ち、映司に対して構える！

「火野、手加減なしで私にドンドン打ってこい！」
「えっでも…」
「剣の扱い方はやりながら教えてやる、さあ、いくぞ！」
「わかりました…いきます！」

一時間後…

「痛てて…シグナムさん、手加減なさすぎですよ…」
「ふふ…しかし、なかなか良くなってきたではないか、火野」

映司の上達ぶりにはシグナムは感心していた。まだ基本しか教えていない筈なのだが
いつのまにか映司は教えていない応用すら自分で解釈して使っていたのだ。

「さて、この後はマラソン１０Ｋｍだ、
いくぞ『映司』」

「あ、シグナムさん、今俺のこと名前で…」
「…ッ！　ち、違う！い、いくぞ！」

「…？」

シグナムの顔は見えなかったが、頬が少し赤くなっていた気がした
…。

映司とシグナムはミッドチルダの学園集中地帯のちょうど中央区を
走っていた。

「はぁ、はぁ、…ん？あれって…」

映司の見た裏道の先に、一つの集団があった。よくよく見ると、そ
の集団のまんなかには
人影があった。

…いじめだ。

「あれは？ッ！火野！」

映司は言葉がでるより先に行動していた。その集団に向かって走って行った。

「ちょっとちょっとぉ！君たち何やってるの！！」

やべッ人だ！
皆、逃げろ！

映司がたどり着く時には、いじめていた集団は逃げていった。

「君、大丈夫？」
映司は倒れていた学生に手をさしのべる。

「は、はい…ありがとうございます…」

映司とシグナムは、先程のいじめられていた学生を連れて近くにあったベンチに座らせていた。

「君、いつもあの子達に？」

「うん、僕は弱いから…いっつもあいつらがストレス発散のサンドバッグ変わりだっていって……。」

「誰かに助けを貰わなかったのか？」

「無理だよ…皆、見て見ぬふりをするんだ…僕がもっと強かったら…」

シグナムは激怒した！

「なんだそれはッ！それでも同じ人間なのか！？」

「落ち着いて、シグナムさん。君、ちょっといいかな？」

映司は学生に向かいあう。

そして、ゆっくりと口を開き、喋り始めた。

「君が言った通り、人って不利益なことに出会うと平気で目を背けてしまう生き物なんだ、それは正しいと思うよ」

「…はい。」

「ッ！？火野！」

「…でも、君の言う『強さ』は違う。」

「本当の強さっていうのは、自分のためにじゃなくて…誰かのためにどこまで自分が頑張れるかってことなんだ。」

「ッ！」
（火野…。）

「だからさ、まず仲間を作ってみたら良いんじゃないかな？一緒に笑って、泣いて、助け合うことのできる仲間をね」

学生はベンチから立ち、その顔には『笑顔』があった。

「ありがとうございます！…まず、仲間を作ってみます！辛いかもしれないけど、絶対くじけません！だって…これが僕の『強さ』だから！！」

その後、学生と別れた映司とシグナムは、またマラソンをしながら、話していた。

「…火野、さっきの言葉、心に響いたぞ」

「ちょっと恥ずかしかったんですけどね、ははっ」

（本当の強さ、か…本当にこいつは、面白い男だ…）

―だから俺はあなた達と戦いますッ！！！！『仲間』を助けるためにッ！！！！！―

（なんだ、いまの声は…どこかで聞いたような…たしか、１０年前に…）

シグナムが考えながら走っていると、
また一つの集団があった。
そこには、最初にシグナムが助けたあの柄の悪い学生がいた。
…しかし、様子がおかしい。

「あ～またか、ちょっとぉ！君た…」
「まて、火野！何か変だ…」

その集団にいじめられていたと思われる学生の前に奇妙な影があった…。

「まさかあれは！『ギャァァァァ！』ッ！」

ボタッ！

柄の悪い学生の右手がその場に切り落とされた。…切断された部分からは血が次々と止まることなく流れ続ける。

「あ、あああ、俺の手がぁッ！！！」

「…君の自慢の右手だったんだよね…ふふ…どうだい？強みが無く

なった気分は…」

メガネをかけ、髪がボサボサして、少しポッチャリ体型のいじめられていた学生が奇妙な笑い方をし、柄の悪い学生に呟く。

「おい、お前ら！助けてくれぇ！」

や、やばい、なんだあの「怪物」は！？

お、おい逃げるぞ！

助けて！ひぃッ！

柄の悪い学生の仲間は逃げていった…

「お前らぁッ！…く、くそぉ！！！」

「どうだい？…ふふっ…俺の気持ち、わかったでしょ？…でも駄目だよ…君はこいつが殺すんだから…ひひひッ！」

そう、そのメガネの学生の前には、あの騎士ヤミーの姿があった！！

「シグナムさんッ！…あ、おとと…」

シグナムは映司にオーズドライバーとメダルを返した。しかし、そこにはシグナムの姿がなく、いつの間にか騎士ヤミーに向かって突進していた！

『ッ！』

次の瞬間、ヤミーの剣と、レヴァンティンがぶつかり合う！

「奇遇だな、また会うことになるとはな！」

『…邪魔だ！』

騎士ヤミーとシグナムは一旦間合いをとる。

「助けてぇぇッ！」

そのまま柄の悪い学生は逃げていった。

「なんなんだ、あんた。俺の邪魔をしないでよ…」

「なるほど、貴様がこのヤミーの親か、欲望はあの学生への復讐といったところか。」

シグナムはメガネの学生をにらみつける。

「そうだよ…ひひひッ…あいつは俺をいつもいじめてくるんだ…だけど俺は、力を手にした！絶対に、絶対にあいつに復讐するんだ！はははははッ！！」

「そんなこと、させないよ」

映司が腰にオーズドライバーを巻き、シグナム達に近づいてくる。

「君は確かにあの学生くんに散々酷いことされてきたと思う、だけどね、君が今やっていることは、あの学生くんがやったことと全く一緒だよ」

映司はシグナムの横に立つ。

「うるさい、うるさい、うるさい！！！
あんたに何がわかる！『わからんな　！』っなに！？」

シグナムが続いて話す。

「貴様が何をされたのは、私達には、わからない、だがッ！貴様のやろうとしている事は見過ごすことなど出来ない！」

シグナムは隣にいた映司に向かい少し微笑む。
映司も自然と笑顔になる。

「もういいよ…こいつらを殺してから、あいつも殺すんだから！」

「やっぱり欲望に飲み込まれた人間に説得しても無理か、準備はいいか、『映司』」

「ッ！うん、『シグナム』！」

映司は「タカ」「トラ」「バッタ」のメダルをセットしようとするが…

『またお前は、何一つ特にならないことを…』

「ッ！またこの声だ、なあ、お前って…」
『今度はこのメダルだ、使え！映司！』
空からまた二枚のメダルが降ってきた。

映司はそのメダルをキャッチして、まじまじと見つめた…
「映司、そのメダルは？」
「大丈夫、さあ、いくよシグナム！」

「セットアップ！！」
「変身ッ！！」

『Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｒａｄｙ』
『クワガタッ！カマキリッ！バッタッ！
ガータッ！ガタガタキリッバッ！ガタキリバ！！』

シグナムは騎士甲冑を身につけ、
映司はオーズに変身した！

しかし、シグナムはオーズがいつもの姿とはまた違う事に気づく！

「映司、その姿は一体…」

オーズが変身したのは
コンボの一つ、
仮面ライダーオーズ　ガタキリバコンボだった！！

太陽が沈みかけ、夕日が表れていた。

０１１話　特訓と本当の『強さ』とガタキリバ（後書き）

次回でシグナム編は完結です。

０１２話　増殖と透明のメダルと嫉妬心

ちょうど太陽が沈みかけ、一日の終わりを迎える頃、ヤミーとの戦いが始まろうとしていた。

「久しぶりだなあ、このコンボ」

今、オーズが変身しているのはガタキリバコンボである。全身が緑色で統一され、頭はクワガタの角を連想させる形状をし、腕にはカマキリの鎌があり、脚はバッタの力を宿した物だ。

「よし、いくぞ！セイヤッ！」

『ッ！』

オーズは腕のカマキリソードで騎士ヤミーを攻撃した。しかし騎士ヤミーは剣でカマキリソードを止める。

「まだまだ！ハッ！」

『ッグ！アァッ！！』

オーズはそのままクワガタヘッドから電撃を発生させ、騎士ヤミーを感電させた！

騎士ヤミーは電撃により、体を満足に動かせなくなってしまった。

『しまった、体が動かん…』

「な、なにやってるんだ！」

メガネの学生が焦り始める。

「ナイスだ、映司！私達もいくぞ、レヴァンティン！」

シグナムはレヴァンティンのカートリッジをロードし、騎士ヤミーを斬る！先程の電撃のおかげで騎士ヤミーは動きがだいぶ鈍ってしまい、得意の剣技が使えなくなってしまった。

「あまり良い気持ちではないが、今回ばかりは仕方がないな」
「シグナム、このまま一気にいこう！」
「ああ、映司！」

シグナムとオーズはそのまま騎士ヤミーに対して連続攻撃を始めた！
オーズはカマキリソードで何度も攻撃し、バッタレッグで回し蹴りをぶつける！
シグナムはその持ち前の剣の腕を最大限に発揮し、騎士ヤミーを切り刻んでいく！

『調子に、乗るなぁ！』

「ッ！！」

そのとたん、ヤミーから衝撃波を放ち、二人は吹き飛ばされた！

「くッ！映司！受けとれ！」
「え？おっと！」

オーズはシグナムからレヴァンティンを受け取り、そのまま騎士ヤミーに飛び込む！

「ウォォォッ！！セイヤァッ！！！」
『グァァァッ！』

オーズはシグナムに鍛えられた剣さばきでヤミーを切り刻む！騎士ヤミーも対抗するがオーズは止まらない！

「これでぇッ！」
『ギャアァァッ！！！！！』

オーズのレヴァンティンによる渾身の一撃が決まった！

『はぁ…くそ…』
「そ、そんな…ふざけるな！俺はゼッタイ復讐してやるんだ！絶対に邪魔されてッ！たまるものかぁぁッ！！！」

『ッ！ヌオォォォォォォォォッ！！』

次の瞬間！騎士ヤミーの体は今まで以上のパワーを放ち、みるみる姿が変わっていった！体は肥大化し、その姿もかつての中世の騎士の姿から、醜いエイリアンのような姿へと変貌した！

「映司、あれは一体！？」

「あれは『欲望の暴走』だ！欲望が肥大化しすぎて原形が押さえられなくなったんだ！」

『グワァッ！！』

ヤミーから生えた触手がオーズとシグナムを襲う！

「ぐッ！」
「うわぁッ！」

二人は触手によって吹き飛ばされた。

「ひひッ！いいぞ！そのまま殺してしまえ！」

「まずい…戦闘が長引けばこちらが不利になっていく！はやく決めなければ！」

「大丈夫だよ、シグナム」

「な、映司？」

「シグナムは俺が絶対！守るから！」

そのままオーズは、シグナムにレヴァンティンを返し、暴走したヤミーに突っ込んで行った！

「ま、まて映司！『それにッ！』…？」

「このオーズの本当の力は、ここからだよ！」

「本当の力って…ッ！な、なに！？」

次の瞬間！シグナムが目にしたのは…

「ウォォ『ウォォ『ウォォ『ウォォ『ウォォ『』『』『』ッ！」
なんと走りながら次々と増殖していくオーズの姿だった！！
「…っぷ！ははははッ！…さすが映司だ…、レヴァンティン、私たちも次で決めるぞ！」
シグナムは鞘とレヴァンティンを組み合わせて、最後の姿を発動させる！
「刃、連結刃に続く、もう一つの姿！」
『Ｂｏｇｅｎ　ｆｏｒｍ』
レヴァンティンは巨大な弓の姿へと変化した！
その間にオーズは５０体まで増え、一斉にジャンプし、オースキャナーでスキャンする！
『スキャニングチャージ！！』
『スキャ『スキャ『スキャ『スキャ『スキャニングチャージ！！』』』』』
「駆けよ隼ッ！『シュツルムファルケン』ッ！！！！！」
「セイヤァァァッ！！！！！」
オーズのガタキリバキックとシグナムのシュツルムファルケンが同時に決まった！

『グオォォォォォォッ！！！』

ヤミーは爆発し、大量のセルメダルが地上にばらまかれた。

「あ、あああッ！」

メガネの学生が逃げ出そうとするが…

「ッ！」

「ぐえッ！」

シグナムの鉄拳をくらい、その場に倒れてしまった。

「やったね、シグナム」

「ああ、格好良かったぞ、映司」

オーズとシグナムは軽く拳と拳をぶつけ合った。

『いや～本当に格好良かったぞ！』

「ッ！？」

オーズとシグナムは後ろを振り返る！

そこにはアンジュの姿があった。

「ア、アンジュ！くそ、またこんな時に！」

「こいつがアンジュ、なんだ、この力はッ！」

『さて、今回め回収させてもらい…ッ！』

「うおォォォッ！」

『タカッ！トラッ！バッタッ！
タッ！トッ！バッ！タトバ！タッ！トッ！バッ！！』

オーズはタトバコンボへとコンボチェンジし、アンジュにパンチを繰り出す！
しかし、アンジュはオーズのパンチを簡単に受け止めた！

「く、くそ…」
『ッ！』

しかし、アンジュの様子がおかしい。
オーズとアンジュは一旦間合いをとり、
いつもの高いテンションではなく、
真剣な声でオーズに質問した。

『オーズ、…なんだそのコンボは、なんだその赤いメダルは！？』
「えっ？（こいつ、タカのメダルを知らないのか？）」
しかしすぐにアンジュのテンションが戻り、シグナムを見る。
「まあ良い、さて、返して貰うぞ！」
「ッく！」
シグナムはレヴァンティンでアンジュを斬った！しかし…

『どこを斬っているんだ？』

「な、なに！？」

なんとアンジュは自分の体を液化し、シグナムの攻撃を避けていた！そして…

ザシュッ！

「あ、あぁぁ…」

アンジュの手がシグナムの胸を貫いていた。その手にはザフィーラの時と同じように光り輝いている物があった。

「シグナムッ！あれは一体！？」

オーズはタカヘッドの超視力でそれを見た。それは…

透明の『コアメダル』だった。

シグナムは力を振り絞りなんとかアンジュから離れた。

『あと3つ、あと3つだ！ハッハッハッ！』

「…そうか、アンジュはコアメダルを集めていたのか！」

「な、何！？」

（でも…なんでザフィーラさんやシグナムの体にコアメダルが…）

『さて、これで今日の仕事はおしまいだ、さらばッ！』

「あ！ま、まて！」

しかしアンジュは背中の翼をつかって、空高く逃げていった。

太陽は完全に沈んだ…。

それから少し時間がたち、今映司達は起動六課の部隊長室にいた。

あの後、メガネの学生は管理局に逮捕された。そして現在、映司とシグナムは事後報告を終えたところだった。

「ほな、二人ともお疲れさなぁ」

「はぁ～事件も無事解決したことで、シグナムとの師弟関係も終わり、特訓もおしまいかぁ、良かった良かった！」

「ん？なにを言っているんだ？」

「…え？」

「別に今回の期間だけなんて一言も言ってないぞ！この後も特訓だ！」

「えぇぇ！？そんなぁ…」

「……。」

はやて　はその二人のやりとりをただ、じっと見ていた。

「映司、先に訓練スペースで待っている、また後でな！　主はやて、それでは失礼します。」

シグナムはそのまま部隊長室を後にした。…しかし　はやて　は見てしまった。

シグナムが振り向くとき、最高に良い笑顔をしていたのを…。

部隊長室は映司と　はやて　の二人きりになった。

「じゃあ　はやてちゃん、また後で『映司くん』…ん？なに？」

はやては無理やり笑顔を作って映司に質問した。

「シグナムとかなり仲良くなったんやなぁ！」

痛い…

「うん、一緒に訓練しているうちに、自然とね！」

痛い…痛い…

「しかも呼び捨てできる仲まで発展とはなぁ…お母さん嬉しいぃ！」

嫌だ…嬉しくない…

「お母さんって、はやてちゃんいくつなんだよ！」

お願い、子ども扱いしないでな…

「あ、映司くんシグナムとの約束あるでしょ！はよ行ってあげなぁ！」

痛い…胸の奥が痛い…。

「あ！そうだった…じゃあね、はやてちゃん！」

映司は急いで部隊長室から出ていった。

部屋は静寂になった…

「わけわからんわぁ…なんでこんなに見ているのが辛いん？…映司くん…。」

いつもとは違う『事件』が起ころうとしていた。それはまた、違う話で…。

０１２話　増殖と透明のメダルと嫉妬心（後書き）

シグナム編終了です。
次回の更新はたぶん２日ぐらいになりそうです。暇あったら更新します。

次の話では、物語の節目に入ります。

013話　掃除と動く陰と疑心

現在、起動六課では大掃除が行われている。

「♪～♪～♪、…あ、はやてちゃん、この書類どこに置いたらいいかな？」

「あぁ、それならその机の上に置いてな」

「うん、わかった」

いつもなら業者が来て、綺麗に隊舎を掃除してくれるのだが、今回は起動六課の隊員全員で掃除を行っていた。

「皆はりきって掃除してるね、はやてちゃん」

「せや、なんせここには色々な思い出があるからなぁ…最後くらい、最高に綺麗にせなあかんとな」

はやて　は少し悲しげな顔をした。

そう、起動六課の試験運用期間があと「2週間」を切ったのだ。

「…はあ、なんとか全部片付いたなぁ…」

「お疲れさま、はやてちゃん！」

映司は　はやてにコーヒーを渡した。

「おぉ！ありがとな、映司くん！」

二人はベンチに座り、一緒にコーヒーを飲み始めた。その二人の姿は、まるで兄妹のようだった。

『んぐッんぐッ…ぷはぁ～…あ』

「映司くん、まるでおっさん見たいやで、いくつなんねん！」

「はやてちゃんこそ俺と全く同じ動作してたでしょ！そっちがいくつなんだよ！」

「なんやてぇ～くらえぃ！」

はやては映司の頬を両手で引っ張る！

「いぢぢ…なんの～」

映司は続いてはやての頬を引っ張る！

「いだだ！負けへんで～」

二人がお互いの頬引っ張り合っている時、ちょうど掃除を終えたなのは　と　フェイト　と　ヴィヴィオがはやて達の所にきた。

「あ、映司さ～ん！」

「あ、おとと…」

ヴィヴィオは映司に抱きついてきた。

「お、ヴィヴィオ、ママ達の掃除の手伝いはできたかぁ？」

「うん！いっぱいいっぱいお手伝いしたよ！」

「そっか、ヴィヴィオちゃん偉いね！」

映司はヴィヴィオの頭を撫でる。

「えへへ～」

「なのはちゃん達もお疲れさんなぁ」

「そんなことないよ、もともと　なのは　が毎日掃除してくれてたし、ヴィヴィオもいっぱいお手伝いしてくれたしね」

「フェイトちゃんだっていっぱいお手伝いしてくれたもんね～♪」

なのは　はフェイトの頭を撫でる。

「ちょっと…なのは、恥ずかしいよ…。」

「にゃはは、…あ、そうだ、はやてちゃん？」

「ん、なんや？なのはちゃん」

「この後の打ち上げって何時からだったっけ？」

「えっと、６時からぁ！」

「そっか、映司もいくんだよね？」

「はいッ！！！！！い、いきましゅ！！！！！！！！！！」

（お前いつも通りかッ！！！）

しかし、この時の映司と　はやて　は知らなかった。この打ち上げが、二人にとって重大な事件になるとは…だれも予想しなかった。

その頃、ミッドチルダのどこかにある、とある洞窟。そこには地球には存在しなかったグリード、アンジュの姿があった。

『セルメダルもかなり貯まった、が、まだだ…まだ足りない！…まぁまだ良い！コアメダルも…着々と取り返してるからなあ！』

アンジュはシグナムから抜き取った透明のコアメダルを自分の真上に投げた。そのコアメダルには『ドラゴン』の紋章が刻まれていた。

そしてそのままコアメダルはアンジュの体内に入った。

その途端、アンジュからはとてつもないエネルギーが発せられる。

『ハハハッ！わかる…わかるぞ…俺の力が少しずつ戻ってくるのが！…さて、そろそろか…

夜天の魔導書の中にある、オーズの力を取り返しになぁ！！』

「えぇ～おほん、我が六課も解隊まで残り2週間を切りました。皆さまも各々の勤務先に異動になります。今日はこの六課メンバーでの最後の慰労会も兼ねてということで…まあ、今日は上司部下関係なくいこか！

じゃあいくでぇ～、かんぱ～い！！！」

『かんぱ～い！！！』

六課の打ち上げが始まった。今回は盛大に行われ、六課メンバー以外に聖王協会の人達や、本局のメンバー（クロノ等）達も参加していた。

「すまないな、部外者の君がここまで助けてくれて…本局の人間としても見せる顔がないよ」

「いえいえ、そんなこと…」

今、映司はフェイトの兄、クロノ・ハラオウンと飲んでいた。

「まさか　なのは　と　はやて　達の世界に『仮面ライダー』という職務があったとは…

まだまだ私達の情報不足という訳か」

「いやいや！職務ってわけじゃないですよ！！

まぁ自然と皆からそう言われてるだけですから」

「『仮面ライダー』は君1人なのか？」

「いえ、まだ他に沢山いますよ！探偵で二人で一人の半分この仮面ライダーもいれば、おにぎりみたいな顔をした宇宙大好きの不良の仮面ライダーもいますし！」

「ははッ！、全く想像つかないがな！」

少し離れたところで、なのは　と、無限書庫の司書長、ユーノ・スクライア　の二人で飲んでいた。

「ゆ、ユーノくん、久しぶりだね。体大丈夫？」

「大丈夫、前と違ってちゃんと休みとっているからね」

「そうなんだ！…ユーノくん、また背が伸びた？」

なのは　はユーノの近くに寄り、背伸びする。その時なのは　とユーノの顔が急接近した。

「…あっ」

「にゃ！？」

なのは　は途端に離れる。

「ご、ごめんなさい！」

「だ、大丈夫だよ！…全く、なのは　のそういうとこ、昔から変わらないよね」

「わ、私だって、…変わってるところいっぱいあるもん…。」

なのは　は頬を膨らまし、怒っているアピールをする。

「全く…」

ユーノはなのはの頭を撫でる。

「ッ！？」

なのはの頬が赤くなる。

「さっきはからかいすぎたよ、ごめんね。だから早く機嫌直してよ、なのは」

「…うん、ユーノくん」

「あの、フェイトさん」
「何、ティアナ？」
「本当に、あの二人って、ただの『親友』なんですか？」
「しょうがないよ、二人とも本当に鈍感なんだから」
「そうだよティア～全くティアは女心がわかってないなぁ！」
「あんたに言われたくないわよ！バカスバル！！」

「あの、主はやて、…それは？」
「ん？これか？わさびたっぷりの寿司や！
これで映司くんを…ひっひっひ！」
はやての手にはネタの裏に物凄い量のわさびが入った寿司があった。
「えっと映司くんは、…あ！いたいた！」

はやては映司とクロノのいる席めがけて走っていった。

「映司く～ん！」

「あ、はやてちゃん！どうしたの？」

「はやて…（あの顔は絶対になにか企んでいるな！）」

クロノは呆れていた。

「これ、めっちゃ上手いで！食べてみいな！」

「ッ！…そうなの？じゃあ１つ！」

映司はそのわさび大量の寿司を食べた。

（ふふっ、さて、どんな顔するか楽しみやぁ！）

「うん、とっても美味しいよ！良いネタ使っているね！」

「……え？」

どういうことや？

『さて、あそこが機動六課か…待っていろ！夜天の主！！』

隊舎の少し離れたところにアンジュの姿があった…。

物語は再び大きく進もうとしている…。

０１４話　幻獣と凍てつく古代獣と２つの閃光

「うん、とっても美味しいよ！良いネタ使っているね！」

はやて　は漠然とした。
いくら映司といってもわさびたっぷりの寿司を食べて平気でいられるわけがない。

彼の気遣い？

いや、彼がそんな事できる訳がない。
笑わせるつもりでとんでもない事を発見してしまったはやて　は動揺してしまった。

「ど、どうしたのはやてちゃん？」

「あ、なんでもないよ！じゃ！」

「…？　うん！」

はやて　は会場から逃げた。今起こった現実から逃げるために…

「はぁ…はぁ…はぁ…」

気づいたら　はやて　は機動六課から少し離れた海岸沿いにいた。

「はぁ…はぁ…私、なにやってるんだろ…」

はやて　は苦しかった、冗談のつもりで映司のとんでもない秘密を知ってしまった罪悪感で心がいっぱいだった。

気づいたら　はやて　の目から涙が流れていた。

「ヒグッわたし…最低や…うッ…なんで…こんなことに…」

『おやおや、お嬢さん、こんな所で何やっているんだい？』

「ッ！？」

そこには、アンジュの姿があった。

『ハッハッハッ！今から機動六課を襲撃して、お前の夜天の魔導書を頂こうとしたが、これは都合が良い！まさか自分から来るとは！』

はやて　はアンジュを睨み付けた。

「今、私は機嫌がすこぶる悪いんや…それとな…」

はやて　はシュベルトクロイツを右手にもち、アンジュに対して構える！

「機動六課をまた火の海にすることは、私がゆるさへん！…セット・アップ！！！」

はやては騎士甲冑を身に付けた！

『いくぞ、小娘ぇぇッ！！』

「はあぁぁぁぁッ！！」

「ッ！」

「どうしたんだ？火野」

映司は微かだが、グリードの気を察知した。

「すいません、クロノさん！ちょっと出掛けてきます！」

映司は急いで察知した場所へ向かう！

その姿をシグナムが見ていた。

「ん？映司か、どうしたんだろうか…」

「なぁシグナム～」

「どうした、ヴィータ」

「はやて　がいないんだ、シグナムなにかしってるか？」

「…ッ！ヴィータ、シャマルとザフィーラに伝えるんだ！映司の後を追うぞ！」

映司はいち早く外にでて、ライドベンダーに乗り、グリードの気を追う。

（なんだ、何か嫌な予感がする…）

『なかなかやるな、小娘。』

「はぁ…はぁ…」

はやて　は苦戦していた。はやて　はもともと広域戦闘型である。近接格闘戦は苦手ではないが、相手はグリード、太刀打ちするのがギリギリである。

「くそっ…なら…これならどうや！」

『…？』

シュベルトクロイツの先に魔力が集中する、そして魔力が『鎌』の

形になっていく！

「ハーケン…セイバーッ！」

『ッ！グゥッ！！』

次の瞬間！鎌の形の魔力はまるでブーメランのように飛んでいき、アンジュの右手を切り裂いた！しかし…

『…ふふふ…』

「ッ！！」

なんと切り裂いた右手がセルメダルになり、再び腕にくっつき再生した。

「そ、そんな…」

『残念だったな、小娘、まぁコアメダルに当たっていたらさすがに不味かったがなぁ！
…さて、次は俺の番だ！』

「ッな！あああああァァァッ！！！」

はやてが気付いた時には遅かった。アンジュの脚にある鋭利な爪で、はやての体のあちこちを引っ掻かれていた。
騎士甲冑はボロボロになり、傷口からは血が流れていた。

「うぅぅ…」

はやて　はその場に倒れてしまった。

『さて、返して貰おうか…』

「…じ、くん…」

『…？』

「映司くん、たす…けて…」

『何を言っているかと思えば…死ねぃ！』

（えいじくん…助けて！）

『ブォォォォォンッ！』

『ッ！』

一台のバイクがこちらに近づいてきた。

『タカ！トラ！バッタ！

タッ！トッ！バッ！タトバ！タッ！トッ！バッ！！』

不思議な歌を流し、アンジュをバイクで体当たりする！

『グゥッ！お前は！』

「オーズ、『仮面ライダーオーズ』ッ！」

オーズは直ぐ様倒れているはやて　の元に向かった、はやては弱々しい笑顔でオーズに呟いた。

「映司…くん…願い、届いたなぁ…」

オーズは　はやて　の手を握る。

「なにやってるんだよ、はやてちゃん、こんなにボロボロになるまで戦って、ほんと　はやてちゃん　はバカだよ」

オーズはそのまま　はやて　を優しく抱き寄せる

「映司…くん？」

「大丈夫だよ、はやてちゃん　は俺が守るから、だから…安心して。」

オーズは　はやて　を抱き抱え、近くの木に丁寧に座らせた。そして、アンジュを睨み付けた。

「アンジュ…覚悟はできているんだね…」

『ふん！オーズとて、すでに俺の敵では…グァァッ！』

次の瞬間！オーズはアンジュの元に跳び、蹴りを放った！

『クソッこれならどうだ！』

アンジュは液体化し、オーズに攻撃しようとするが…

「させないッ！」

『ライオン！トラ！バッタ！』

オーズは直ぐ様ラトラバに亜種チェンジし、頭のライオディアスを放つ！

『ギャアァァァッ！！』

アンジュの液体化が解かれる。

「まだまだッ！」

『ライオン！ゴリラ！チーター！』

オーズは更にラゴリーターに亜種チェンジし、助走をつけ、腕のゴリバゴーンでアンジュを殴る！

『ガァァッ！調子に乗るな！』

アンジュも負けじとオーズを殴った！

「グッ！ならばッ！」

『クワガタ！カマキリ！チーター！』

オーズはガタキリーターに亜種チェンジし、アンジュに回転斬りを当てた！

『クソッ…オーズ…まさか俺をここまで本気にさせるとは、許さんぞぉッ！』

「ッ！」

アンジュからとてつもないエネルギー波がでて、オーズをぶっ飛ばした！

「ああッ！…ッ！？」

『遅いッ！』

アンジュは猛スピードをだし、オーズを殴った！

「グァァッ！！」

『まだまだァッ！！！』

アンジュの脚の爪による連続攻撃がオーズにあたった！オーズの体には火花が飛び散り、そのままオーズは変身が解除され、その場に倒れてしまった。

「あ、ああ…」

『こんなものか、オーズ、…？これは…』

アンジュは映司から沸く謎のエネルギーに気がついた。

しかし、次の瞬間！

「でえぇぇぇぇいッ！」

『ッ！！』

ヴィータのグラーフアイゼンがアンジュの体に当たった！

「映司ッ！主はやてッ！」

そのまま、シグナム、シャマル、ザフィーラ、リィンフォースが到着した！

「大変！はやく治療しないと！」

シャマルはボロボロの　はやて　を見て、すぐに治癒魔法を開始した。近くにリィンとザフィーラも寄って来る。

「はやてちゃん！」

「主！」

「大丈夫や…ちょっと…調子に乗りすぎた…だけや…」

「てめぇがアンジュか、はやて　と映司をやりやがって！許さねぇ！！」

「私は今、最高に怒っている！覚悟しろ、アンジュ！！」

シグナムとヴィータは構える！
だが…

「駄目だ！い、今は逃げッ……ッ！！」

ヒュンッ！

「…う、うそだ…ろ…」
「があ…あ…あ……」

『ん？なにか、言ったか？』

アンジュの超高速の爪攻撃により、シグナムとヴィータは引き裂かれた。騎士甲冑に原型がなく、体中から血を吹き出していた。

二人はそのまま倒れてしまった…。

「シグナムッ！！ヴィータッ！！」

はやて　が叫んだ！！

そして、アンジュは映司に近づき、首を掴み、上にあげる。

『お前達に面白いものを見せてやるッ！』

次の瞬間！アンジュの右手が映司の胸に置かれ、異色の波動を流された！

「ああああアアアアアアッ！！！！！！！！」

「え、映司くん！！！！」

そして、映司はみるみる内に、オーズとはまた違った、怪物の姿にさせられた…。

その姿を見て、はやて　、ヴィータ、シグナム、リィン、シャマルは驚愕する。

ザフィーラはその姿に見覚えがあった。

そう、…グリード体である。

「なんや…あの姿…」

「ッ！映司くん…」

「な、なんなんですか…」
「映司…どういうことだ…」
「そ、そんな…映司…」
『お前達が今日、今まで過ごしてきた男は人間ではない、俺と同じグリードだ！』
「違う…そんなわけない…映司くんは…」
『なら近くで見てみろ！』
アンジュは映司グリードをはやての元へ、投げ飛ばす。
『グァァ…う…』
はやては体を引きずりながら映司グリードの近くまで移動する。
『は、はやて…ちゃん…ごめんなさい…』
「嘘や…嘘や嘘や嘘や嘘やッ！！！」
はやては映司グリードに抱きつく。
「映司くんは、人間や、違う…私の、私達の大切な、『家族』やッ！」
はやてはボロボロながら、映司グリードの前にたち、シュベルトクロイツを構える！

『はやて…ちゃん…』

「今度は私の番や…私がこの『家族』を、守るッ！」

『面白い…まだやる気か、もう良いここで全員死ねぇッ！！』

「エクセリオーンッ…」

「トライデント…」

『ッ！！』

「あ、あれは…」

「バスターッ！！」
「スマッシャーッ！！」

上空から、桃色の魔力砲と黄色の魔力砲が放たれる！！
『ギャアァァァッ！！！！！』

アンジュに当たり、大量のセルメダルが散らばった！

「ごめん！遅くなっちゃった！」
「皆をこんなことにして、…許さない！」

そこに現れたのは、

高町なのは　と　フェイト・T・ハラオウンの
二人だった。

０１４話　幻獣と凍てつく古代獣と２つの閃光（後書き）

だいぶストーリーが進みました。
次回で決着です。

０１５話　夜天の主と欲望の王と『家族』

はやて達を助けたのは
スターズ分隊隊長　高町なのは　と
ライトニング分隊隊長　　フェイト・Ｔ・ハラオウンだった。

二人は　はやて　の目の前に降り立つ。

「なのはちゃん…フェイトちゃん…」

なのは　とフェイトは振り向かずに答えた。

「安心して、はやてちゃん、今機動六課から増援を呼んだから」

「あと５分もすれば、クロノ達が来る、…それまで」

バルディッシュ・アサルトをアンジュに向ける！

「私達が…相手だ！」

アンジュが　なのは　とフェイトを睨み付けた！

『小娘ども！どこまで俺の邪魔をすれば気がすむんだ！』

アンジュは完全に切れていた！

「ここじゃ不味いね、フェイトちゃん、何とかして海上に移動させないと」

「それなら！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｆｏｒｍ』

『ッ！！』

フェイトは真・ソニックフォームになり、アンジュを掴み、海上まで飛んで移動させた。

その隙に、なのは　は倒れていたシグナムとヴィータの元に向かった。

「シグナムさんッ！ヴィータちゃんッ！」

「すまない…高町…」

「さすがに…効いたぜ…」

二人とも既に虫の息だった。

「大丈夫、医療チームも呼んだから、もう少し待ってて。」

そして、今度は　はやて　と…変わり果てた姿の映司に近づいた。

「映司…くん？」

『ごめん…なのはちゃん、俺、人間じゃな…』

「違うで、映司くん」

『…？』

立っていたはやてが倒れている映司グリードの顔までしゃがみ、手を握る。

「映司くんが人間じゃなくても、グリードであっても、映司くんは映司くんや。私達がそんな『ちっぽけ』なことで映司くんを見捨てないで…」

『ッ！』

映司はグリード体から人間に戻る。

なのは　はそんな二人のやりとりを見て、自然と笑顔になる。

「さて、なのはちゃん、そろそろ決めんとなぁ！」

「はやてちゃん、でも体が！」

「なに、シャマルのお蔭で見た目以上に回復したしな、映司くんは、今日は休んでてな」

「はやてちゃん？でも俺…」

「大丈夫や、第一オーズじゃ空飛べんやろ！」

「あ、そっか！」

「（納得しちゃうんだ…）はやてちゃん、それじゃあ！」

「よし、いくでぇ！リィン！！」

「はいですぅ！！」

物陰からリィンフォース？が出てきた。

「リィン、ユニゾンや！」

「はい、はやてちゃん！」

次の瞬間！リィンは　はやて　の体に入る！

『ユニゾン、イン！』

はやての髪の色は白髪に近い色になり、背中の黒い翼が更に大きくなった！

そして、なのは　と　はやて　はアンジュとフェイトが交戦している海上へ飛んでいった。

（フェイトちゃん、聞こえるか？）

（は、はやて？）

『なによそ見している小娘ぇ！』

「ぐッ！」

（な、なに！？）

（今から詠唱を始めるぉ、だから合図と同じにそいつから離れて！）

（わかった！）

「喰らえッ！」

『ッグアァッ！』

フェイトのライオットザンバーがアンジュの体に切り刻まれる！

「アクセルシューター、シュート！」

『ッ！ギャアァッ！』

続いて到着した　なのは　のアクセルシューターがアンジュに当たった！

「なのは…！」

「フェイトちゃん…！　」

一方その頃…

はやて　は少し離れたところで魔方陣を展開し、詠唱していた。

「…遠き地にて、闇に沈め！」

『はやてちゃん、発動まであと5秒です！』

（なのはちゃん、フェイトちゃん、今や！）

「よしッ！」
「今だッ！」
なのはとフェイトはアンジュの元からすぐに離脱した。
『な、なんだ！？』
しかし、アンジュが気づいた時にはすでに遅かった。
「デアボリックエミッションッ！！」
次の瞬間！アンジュを中心に魔力攻撃を充満させた！
『ギィヤアァァァァァァッッッ！！！！！！！！！！』
辺り一面黒い球体に包まれた。
なのは　とフェイトはギリギリ逃げることができた。
映司はただそれを見ているしかなかった。
「す、すごいな、これがユニゾンしたはやてちゃんの力…」
発動し終わったあとの静寂が訪れた。
はやて　には手応えがあった。
「やったか？…！」

しかし、そこにはボロボロになりながらも滞空しているアンジュの姿があった。

『ゆ…許さん…夜天の主ぃッ！！！』

（嘘やろ？…デアボリックエミッションをもろに当たって、立っていられるなんて…）

『許さねぇ…殺してやる！』

「ッ！！」

その時！

「そこまでだ、グリード！」

『なにッ！！』

「あ、あれは、」

そこにはクロノや本局の隊員達、聖王協会の人達が到着した。

さすがに、アンジュにとっても状況が悪かった。

『仕方がない…今日はこれで帰るとするか…だが！お前達に面白いことを教えてやる！』

「ッ！？」

『世界の、終焉は、近い！』

その時映司は驚いた！世界の終焉、かつてドクター真木が行おうとしていた計画である。

「世界の終焉、それがアンジュの欲望…」

『去らばッ！人間どもッ！！』

「ま、待て！グッ！」

次の瞬間、アンジュの頭から熱源光線が放たれた。気が付いた時にはアンジュを見失っていた…

機動六課、医療室

先程の戦いで大怪我をしたシグナム、ヴィータ、映司と　はやての四人は、シャマルによる治療を受けていた。あらかた四人の傷はだいぶ治っていた。立ち会いとして、ザフィーラとリィンもいた。

ザフィーラが映司の元へとよってくる。

「火野…もう隠せないぞ…」

「わかってます、皆！」

映司はその場にいた全員を呼んだ。

「映司くん、全部教えてくれるんよな？」

「うん、全部話すよ…俺の過去のこと…」

映司はかつてザフィーラ喋ったことを隠さず全員に話した。

話し終わった後、全員沈黙状態になった。

はやては映司の前に立つ。

「はやてちゃん？ッ！」

次の瞬間、はやて　は映司にビンタした。

「はやてちゃッ！！」

さらに　はやて　は映司のアバラを殴りながら押し倒し、馬乗りになりながら襟をつかみ、叫んだ！

「ッこのドアホッ！！！」

「は、はやてちゃ…」

はやて　は泣きながら喋り続けた。

「なんでそんな大事なこと隠してたん！？
そんなんあんまりや、辛すぎるやないか！！
映司くんばかり酷い目あって…
もう…ヒグッ…私なにもできへん…」

「そんなことないよ、はやてちゃん」

映司はそのまま　はやて　を抱き締めた。

「はやてちゃんは、あの時俺の事を『家族』って読んでくれた。それだけで俺は救われたんだ。」

「ッ！！」

「だからさ…俺も『八神家』の1人になりたいんだ…いいかな？はやてちゃん」

「…ええよ、今日から映司くんは私の家族の一員や…」

はやて　は映司から離れ、涙をふき、改めて映司を見つめ直す。

「これから宜しくな、映司くん！」

はやて　は手を差しのべる。

「うん、はやてちゃん！」

映司はその手を握る、その瞬間、映司は救われた。また、新しい家族が誕生した。

「え、映司が私達の家族、と、いうことは師から姉になったということか…」

「あら、シグナムなにを赤くなってるの？」

「シャ、シャマルうるさいぞ！」

「へっへっへ！これで私に妹の他に弟ができたってわけか！」

「ヴィータ…いくらなんでも無理が…」

「うっさい！ペット！！」

「ヴィータ…」

「わぁ～リィンとアギトにお兄ちゃんができたですぅ♪」

「アンク…俺はまた新しい居場所ができたよ…クスクシエの他にね。
まさかまた俺に家族ができるなんてね、

俺の微かな『欲望』

叶ったかな……。」

０１５話　夜天の主と欲望の王と『家族』（後書き）

中盤突破しました。
これからどうなるのか、ご期待ください。

０１６話　風の癒し手とデートと過去の罪

「はッ！」
「セイヤァッ！」

機動六課の訓練スペースでは、シグナムとオーズのタトバコンボに変身した映司が、
模擬戦を行っていた。

オーズの右手には青色の剣が握られていた。
そう、この世界にはないはずの「メダジャリバー」だった。

「すごいな、シャーリーさん、俺の証言だけでここまで作れるなんて、本物と全然変わらないな！」

「しかしその剣は凄いな映司、セルメダルを投入するたびに切れ味が増すとは！」

シグナムはメダジャリバーに興味津々だった。

「まったく、あの二人は怪我を知らないんか？」

「大丈夫よ　はやてちゃん、いざとなったらまた私が治すから！」

二人が模擬戦をしている少し離れた所で　はやて　と　シャマルがいた。

「さて、映司！次で決めるぞ！」

「えっ！ちょ、ちょっと！」

「レヴァンティン！」
シグナムはレヴァンティンのカートリッジを一弾消費する。

「こうなったら…！」
オーズはメダジャリバーにセルメダルを二枚投入し、オースキャナーでメダジャリバーをスキャンする。
『ダブル！スキャニングチャージ！！』

「紫電…一閃！！」
「セイヤァァッ！！」

「え？ちょ…」

次の瞬間、その場で大爆発が怒った…

「当分二人は模擬戦禁止や、わかったな！？」

『は、はい…』

現在、二人はシャマルに治癒魔法をかけられていた。

「すまないな、映司。お前が私の義弟になると思うとつい興奮してしまってな」

「義弟って…取り回しかた固すぎだよ…っ痛てて…」

「はいはい、映司くんは男の子でしょ？」

「すいません、シャマル先生」

「ッ！あ！」

はやて　が突然何かを思いつき、映司とシャマルに近づいてきた。

「そや、シャマル。この際だから映司くんの『味覚』と『色彩認識』の治療してみてくれな、せめて検査だけでも、頼むぁ！」

はやて　はシャマルに頭を下げた。

「は、はやてちゃん！頭あげて！」

シャマルは　はやて　の突然の行動に驚いた。

「わかったわ、とりあえず見てみるわね」

「でもシャマル先生、俺のこれはあっちの世界では…」

シャマルは映司に笑顔をみせる。

「あっちではね、こっちは魔法文化が発達しているのよ！」

映司は自然と笑顔になった！

「そうか…！ぜひお願いします！シャマル先生！！」

機動六課の医務室、映司はシャマルに治療されていた。そして一通り終えた後、シャマルはコーヒーを持ってきた。

「映司くん、これは『甘い』コーヒーよ、飲んでみて。」

映司はそのコーヒーを飲んだ。ちなみにこのコーヒーは甘いといったが、実は『苦い』のである。これは本人が嘘をつかせないための予防策なのである。

しかし映司は…

「…すいません、シャマル先生、全く味を感じとれません」

「…そっか…。あ！そうだ！映司くん？」

「な、なんですか？」

「気分て・ん・か・ん・に…」

「…？」

「今日一日『デート』しましょ♪」

「デート…ですか？」

ミッドチルダ、巨大ショッピングモール
そこに私服姿のシャマルと映司の姿があった。

「まぁデートっていっても、ただ映司くんの八神家入りのお祝いにシャマル先生が料理振る舞うための材料調達だけなんだけどね！」

「へぇ～！シャマル先生って料理できたんですか！」

「ふふっ！これでも腕には自信があるのよ♪」

「はやてちゃん直伝だからなぁ、きっと上手いんだろうな！」
しかし、映司は知らなかった。シャマルの料理は壊滅的だということを…。

シャマルはそんな映司をじっと見た。
（全く、味なんて感じ取れないくせに、本当に映司くんお人好しなんだから…でも、そういうところ、嫌いじゃないんだけどね！）
「そういえばシャマル先生、一体何を作るんですか？」
「やっぱり、カレーかしら？」
「カレーですか、わかりました！早速探し始めましょう！」

だが、映司は驚愕した。
シャマルの食材のチョイスを…
「あ、この羊羹良いわね！隠し味になるわね！」
「え！？羊羹ですよ！」
「映司くん…わかってないわね、羊羹の甘味成分によってカレーはさらに濃厚になるのよ！」

「クスクシエでは…聞いたことないんだけどなぁ…ま、まぁ世界は広いから！」

「あら！このみかん！カレーの隠し味にぴったりだわ！」

「シャマル先生！み、みかんはさすがに…」

「わかってないわね、映司くん…みかんの酸味成分によってカレーはさらに濃厚になるのよ！」

「せ、世界は広いからなぁ！…　たぶん。」

「あら！このアイス、カレーの隠し味にぴったりだわ！」

「シャマル先生！ちょ、ちょっと待って下さい！！」

「一通り買い物終わったなぁ…終わったのか？」

「ありがとう、映司くん！助かったわ！」
映司とシャマルは歩いていた。
映司は両手にカレーの…食材を持っていた。

ちょっとよろしいでしょうか？

『…？』

映司とシャマルの背後に、黒のジャンパーを着て帽子をかぶった怪しい人間がいた。

「はい、なんでしょうか？」

映司が答える。

「えっと、そちらの女の片、機動六課のシャマルさんですよね」

「はい、そうですけど…」

「私、週間ミッドチルダの記者の者です！１０年前に起こった『闇の書事件』について取材させてください！」

「ッ！！」

シャマルは動揺した。
「すいません…また今度に…」
「そこをなんとかッ！！」
記者はしつこく追及してきた。

「まぁまぁ記者さん落ち着いて！シャマル先生、行きましょう！」
映司はシャマルの手を引いて足早に逃げていった。
「あっちょっと待って下さい！」
しかし映司とシャマルの姿はなかった。

「なんとかまいたみたいですね」
「そうみたいね…」
二人はファーストフード店に逃げ隠れていた。
「シャマル先生、さっきの話って…」
「闇の書事件…１０年前、私達が深く関与した事件…」
その場の空気が重くなった。

「すいません！その…」

「いや、聞いてほしいの…」

映司は姿勢を正し、改めてシャマルを見る。

「あれは、クリスマス前の事よ…」

はやて　とヴォルケンリッターの過去が今、明かされる…。

０１７話　数えた罪と鮫とシャウタ

今から１０年前、
地球にある海鳴ではとある事件が起こった。
海鳴で体の不自由な少女がいた。
少女の親はまだ幼い時に事故で亡くなってしまい、親戚やいとこもいなく、
１人、孤独に毎日を過ごしていた。
そう、「八神　はやて」である。
はやて　は病院や図書館に通う生活をずっとしていた。
そんな彼女にも微かな「欲望」があった。
学校に行きたい…
「家族」が欲しい…
しかし、はやて　はそんな欲も口に出さず、ただ、じっと我慢していた。

そして、運命の夜、彼女がベッドに横たわりながら本を読んでいると、
本棚から一冊の「本」が光を放ちながら現れた。
夜天の魔導書…当時は「闇の書」と言われていた。

そして、はやて　の目の前に、四人の「守護騎士」が現れた。
シグナム達である。

この出逢いが、はやて　と　ヴォルケンリッター達の運命を大きく変えることとなる。

ヴォルケンリッター達は常に闇の書の主の命令に常に従わなければならない。
今まで数えきれない程の人達や国々を殺したり壊してきた。

シグナム達はそれを繰り返すうちに「感情」というものが消えていた。
どの主も自分達を物としか、扱ってくれなかった…

しかし、はやて　は違った。

シグナム達は驚愕した。

服を与えてくれた。

ご飯を作ってくれた。

一緒に遊んでくれた。

風呂にも入らしてくれた。

色々な事を教えてくれた。

今までしてくれなかった事を、今度の主はしてくれた。

ヴォルケンリッター達は、忘れかけていた「感情」を取り戻してい

った。

しかし、幸せは長く続かなかった。

はやて　の病状が悪化し、倒れてしまった。

はやて　の原因不明の病気の発生源は、あの「闇の書」によるものだったのだ…。

シグナム達は愕然とした。

はやて　はこのままだと長くもたない。

そして、ヴォルケンリッター達には、

ある「欲望」が生まれた。

はやて　を助ける。

助けるためには闇の書を完成させなくてはいけない。
それからシグナム達はページを埋めるための源となる、魔術師に存在するリンカーコアの収集を始めるのであった。

これが、後に「闇の書事件」と呼ばれることになっていく…。

「これが、闇の書事件…の一部の話かな」

映司はずっと真剣にシャマルの話を聞いていた。

「私達は、いくら　はやてちゃん　のためといっても、色々な人達を傷つけてきたの、本当に、ただそれだけしか見えてなかったから…忘れたくても、忘れられないわ。」

「それは駄目ですよ、シャマル先生」

「え？」

「確かに皆は、過去に取り返しのつかない事をしてしまったと思います、でも、『忘れる』ことは、駄目だとおもいます。大事なのはその過ちを学習して、未来に繋げていく事なんじゃないですか？」

シャマルは目を大きく見開いた。

「未来に繋ぐ…そうね、私、ただ過去から逃げていただけなのかもしれないわ」

映司はシャマルの右手を両手で握った。

「大事なのはこれからですよ、一緒に頑張っていきましょう！」

シャマルは笑顔になった！

「ありがとう…映司くん！」

―思い出して下さいッ！！！あなた達は、本当は何をしたかったんですかッ！！！―

（今の声…どこかで…映司、くん？）

「シャマル先生、どうしたんですか？」

「いえ、なんでも！」

みつけましたよ…

『ッ！？』

そこには、あの雑誌記者がいた。

「待ってください！あの…」
「いえ、待って！」
シャマルは席を立ち、記者の前に立った。
「私でよければ、話します。」
「シャマル先生、良いんですか？」
映司はシャマルの行動に驚いた。
「いいのよ、映司くん、もう過去からは逃げない！」
シャマルは改めて記者に振り向いた。
「さあ、さっそく…」
「いや、もう良いです」
「ッ！？」
記者の様子がおかしい。さっきとは明らかになにか違う気がした。
「いや、もういいんですよ。わざわざ頼まなくても、吐かせればいいんですからッ！！」
次の瞬間、記者の背後から鮫の形をしたヤミーが現れた！

「ッ！？」
店内がパニック状態になった！
客や店員達はそこらじゅうに逃げ惑う！

「ヤミー！？ここじゃ危ない！」
映司はヤミーを掴み、横のガラス窓から外に飛び出した！

「映司くん！」
シャマルは急いで映司の後を追った！

「ふふふ…私は知らないですよ、あの時逃げたシャマルさんのせいですからね…」

映司は鮫ヤミーの姿を見て驚いた、大きな頭に鋭い歯、噛まれたら最後だろう。

「映司くん、大丈夫！？」

「大丈夫です、シャマル先生。…こうなったら！」
映司は懐からオーズドライバーを取りだし、腰に巻いて、メダルを

セットし、スキャンした！

「変身ッ！！」

『タカ！トラ！バッタ！

タッ！トッ！バッ！タトバ！タッ！トッ！バッ！！』

映司はオーズに変身した。

「いくぞ、セイヤァッ！」

『グァッ！！』

オーズはメダジャリバーで鮫ヤミーを斬った！

「もしかして、見た目だけなのかな？」

オーズは更にメダジャリバーで鮫ヤミーを切り刻んでいくッ！

『ぐ…ぐぅ…』

（いまだっ！）

しかし、シャマルは不思議に思った。いくらなんでも弱すぎる…。

その間にオーズはメダジャリバーにセルメダルを三枚セットし、スキャンする！

『トリプル！スキャニングチャージ！！』

「ハァァァァァッ！！セイヤァァァッ！！！」

『ッ！！』

オーズは鮫ヤミーに『オーズバッシュ』を放った！その威力は次元の空間さえ引き裂いてしまう威力である。
しかし…

「やった！」
「いえ、まだよ！」

『…ふふふ、きかんな！』

なんと鮫ヤミーは自分の体を液体化して攻撃を回避していた！

「そんな！？でもこのメダルで…」

オーズはライオンメダルを取り出すが…

『させんッ！』

「ッ！うわぁッ！」

鮫ヤミーの口から潮が発射され、手に持っていたライオンメダルを撃ち落とされてしまった。そのままヤミーは再び液体化し、オーズに攻撃した。

「うわッ…か、体が思うようにうごかない…」

「まだ、アンジュとの戦いのダメージが残っているのね、こうなっ

たら…クラールヴィント！」

『ッ！』

シャマルは騎士甲冑を見にまとい、クラールヴィントの力で鮫ヤミーを拘束した！

そのままシャマルはオーズの元へ駆け寄る。

「映司くん、今から私のほとんどの魔力を使ってあなたの体を回復させるわ！」

「シャマル先生、そんな事したら…」

「大丈夫よ、シャマル先生は、戦うお医者さんなんだから！」

「ッ！…お願いします！」

シャマルはオーズに治癒魔法を始めた、

鮫ヤミーは液体化して抜け出そうとするが、魔力による拘束のため、液体化することができなかった。

「…はぁ…はぁ、これで、大丈夫よ…」

オーズを完全に回復させ終えた途端、シャマルは倒れてしまった。

「シャマル先生ッ！！」

「ごめんなさい…ちょっと、つかれちゃったかな…」

オーズはしゃがみ、シャマルの手を握る。

「安心してください、シャマル先生は、俺が守ります！」

オーズは再び、鮫ヤミー目掛けて攻撃しようとするが…

『おい、映司ッ！メダルは大事に扱え！！』

「あっ、この声！」

『映司！コンボだッ！！』

空から三枚のコアメダルが降ってきた。

オーズはキャッチして、そのメダルを見る。

「…なるほど、鮫には鯱ってね！」

そのままベルトにセットしてあるメダルをとり、新たに「シャチ」「ウナギ」「タコ」のコアメダルをセットし、オースキャナーでスキャンした！

『シャチ！ウナギ！タコ！
シャッ！シャッ！シャウッター！
シャッ！シャッ！シャウッター！！』

「あれって…」

『ッ！！』

オーズがコンボチェンジしたのは、
青のコンボ、シャウタコンボだった！！！

018話　液化とカレーと『味』

「青い、オーズ？」

シャマルは初めてみるオーズの姿を見て驚いた。

頭はシャチを催した形、腕には鞭を装備し、足にはタコの吸盤の模様が浮かんでいた。

「ハッ！！」

『ッ！！』

オーズと鮫ヤミーの口から潮が放たれた！

『ッ！？グオォッ！！』

しかしオーズの潮攻撃の方が一歩上で鮫ヤミーは吹き飛んだ！

「まだまだぁッ！」

続いてオーズの電流鞭攻撃が放たれた！それを喰らった鮫ヤミーは感電し、ひるんだ。

『く、くそォ…だが！』

鮫ヤミーは液体化し、逃げていく。

「映司くん！」

「大丈夫です！」

次の瞬間、オーズも液体化し、鮫ヤミーを追いかけていった！

「オーズって、なんでもありなのね…」

そのころ鮫ヤミーは路地裏に逃げ込んでいた。

『こ、ここまでくれば…大丈夫だろう…』

「逃がさないよ！」

『な、なにぃ！？』

鮫ヤミーのすぐ後ろには、オーズの姿があった。オーズはウナギウィップでヤミーをつかみ、足をタコのような形に変型し、百烈キックを浴びせた！

「アバババババババババッ！」

『ギャアァァァァァッ！！！』

鮫ヤミーはもうボロボロで動ける状態ではなかった…

「これで決めるッ！」

オーズはメダジャリバーを取りだし、セルメダルを三枚投入し、オースキャナーでスキャンした！

『トリプル！スキャニングチャージ！！』

「ハァァァァァァッ！セイヤァァァァッ！！」

『おのれぇぇぇぇぇッ！！！』

再び「オーズバッシュ」が放たれた、鮫ヤミーは爆発し、大量のセルメダルが地上に落ちた。

映司は変身を解き、シャマルの元へと向かった、遠くからシャマルもこちらへ走ってきた。

「シャマル先生～！」

「映司く～ん！」

これでこの事件は終わるかと思われた…

『おっと、よそ見はいけないなぁ』

「ッ！シャマル先生、避けて！」

「え？…あッ…」

シャマルは後ろからアンジュによって胸を貫かれていた。

「ッ！シャマル先生！！」

映司はすぐシャマルに駆け寄り、アンジュを睨みつける。

「アンジュ、お前！」

『そう怒るな、オーズ、別に危害をあたえているわけではないだろう。ほら、これを返して貰っているだけなのだから』

アンジュの手には透明のコアメダルが握られていた。シャマルには怪我はなかったが、疲れていたのか、気絶してしまった。

「くそッ！」

映司はオーズに変身しようとするが…

『おい、まてまて、無駄な戦闘は控えておこうじゃないか。この前の戦いでお互いボロボロだろ？』

アンジュは生意気そうに映司に喋った、しかし映司も回復したとはいえ、まだ本調子ではなかった。映司は怒りをこらえ、アンジュを見逃した。

「…わかった、もうどっかに行ってよ」

『話が合う奴は嫌いではないぞ！さらば！』

アンジュは翼を広げ、空高く飛んでいった…。

事件は解決し、記者は逮捕された。
再び平和になると思われていたが、八神家には更なる試練が訪れた。

「さて、シャマル先生はりきって料理しちゃうわよ！」

「は、はい…」

すっかり回復したシャマルは機動六課のキッチンにいた。そこには映司の姿もあった。

（だ、大丈夫かな？材料はまったくカレーに合いそうな物ないけど、…もしかして意外に美味しい物できちゃうのかな？）

しかし、シャマルは期待を裏切なかった。
材料を切るまでは良かった…しかし…

「ふふふ～ん♪今回のカレーの出来は最高ね！！」

「う、うそでしょ…」

シャマルのカレーはカレーじゃなかった。
まずカレー特有の色をしていない。更に臭いが半端ない。味のわからない映司でもわかった。これは確実にまずい。

鴻上会長の食べてもなくならないケーキのほうが何倍幸せだろうか。

「映司くん？」

「は、はい！」

「完成したから皆を呼んできてくれる？」

「…はい。」

映司は部隊長室に向かった。そこには八神家全員そろっていた。…もちろん全員どんよりしていた。

「…映司くん？」

「どうしたの？はやてちゃん」

「…完成したんか？」

「う、うん。一様ね」

途端に　はやて　は机に倒れた、続いてヴィータが飛び出してきた。

「おい、映司ッ！」

「な、なに？」

「なんで…なんでシャマルと一緒にいたのに止めてくれなかったん

だよ！」

「えぇッ！？」

「やめろヴィータ！…シャマルは別に悪気があってやったことじゃないんだ…私は食べよう…ヴォルケンリッターの烈火の将として！！」

全員覚悟を決め、シャマルの待つ、ランチルームに移動した。

「さあ、皆！召し上がれ！！」

『い、いただきまぁ～す！』

はやて達は一斉に食べた。
衝撃だった。
隠し味が隠しきれていない。
はやて　とヴィータは予想通りの反応、

シグナムは…烈火の将から劣化の将になっていた…、
ザフィーラは、必死にポーカーフェイスを保っているが、頬がひきつっている。

「どう、今回は今までで最高傑作なんだけど♪」

「うん、めちゃうまいで～…」
（皆！不味いは禁句やで！）

（うぅ～はやて～…）

（私は烈火の将…私は烈火の将…）

（……。）

（あかん、なんとかしな…大丈夫、不味いって言わなければ…）

「…不味い。」

その場にいた全員が言葉を発した人物を見た！

ヴィータ？シグナム？ザフィーラ？
…いや、ちがう…

「…不味いよ、シャマル先生…」

映司だった。

「え…映司くん？」

はやて　は驚いた、映司には味覚がない。
その映司が今、不味いと言った。

「…不味い、不味いですよ…グスッ…本当に不味いですよ…」

映司は泣きながらシャマルのカレーをずっと食べていた。

「映司くん、味覚が…」

シャマルは今にも泣きそうだった。

「え、映司くん…映司くんッ！！」

はやて　は泣きながら映司に抱きついた。

「ほんま良かったなぁ…ヒグッ…ほんま…良かった…！」

「まさか、シャマルのカレーで味覚がなおるとは…」

「おそらく前に受けた治療がきいたのかもな、映司…良かったな」

「でも変だよな…不味いカレー泣きながら食べるやつがこの世にいるなんてな！」

018話　液化とカレーと『味』（後書き）

シャマル編終了です。

０１９話　紅の鉄騎とアイスと宣戦布告

「ちょっとヴィータ副隊長ッ！！！
また私のアイス勝手に食べたでしょう！！」

「なんだスバル！別にアイスの１つや２つ良いじゃねーか！！」

午後９時、機動六課のランチルームでは、くだらない戦いが始まろうとしていた。
しかし、スバルとヴィータにとっては、アイスは自分の命と同等のものと考えても良い。
二人には風呂上がりのアイスはオアシスなのだ。

「今日という今日は許しませんよ！！」

「なんだ？ヴィータ『副隊長』に逆らうのか？スバル！！」

「それとこれとは別ですッ！！！」

「あ～あ、またやっとるなぁ」

「スバルちゃんとヴィータちゃん？なにやってるんだろう？」

ちょうど風呂上がりの　はやて　と映司がそこに通りかかった。

「まぁ気にせんでもえぇよ、映司くん。あの二人はいつものこと…『ちょっとちょっと！二人ともなにしてるの！！』…ってえぇッ！？」

映司は　はやての話を最後まで聞かず、スバルとヴィータの元へと向かった。

「まったく…本当にお人好しなんだから…」

「全く、ヴィータちゃん駄目じゃない、スバルちゃんのアイス勝手に食べたら！」

「うっさい！私はな！『わん　おあ　ふーる　ふーる　おあ　わん』の精神の持ち主なんだよ！！」

「…ヴィータ副隊長、それ言うなら『ｏｎｅ　ｆｏｒ　ａｌｌ　ａｌｌ　ｆｏｒ　ｏｎｅ』ですよ…じゃなくて！アイス代ちゃんと返してくださいね！」

「はぁ？なんで私が金返さないといけないんだよ！」

「ちょ、ちょっと！何言ってるんですか！当たり前でしょ！？」

映司が二人のやり取りを見て、再び焦り始める。

「ちょっと二人とも、落ち着いて！」

「だいたいヴィータ副隊長はアイス食べ過ぎなんですよ！せめて少し我慢を覚えてくださいよ！」

「な、別に良いだろ！アイスは別腹なんだよ！」

「いい加減にしないと本気で怒りますよ！ヴィータ副隊長！！」

「ふん！なにが起きようと、アイスだけは絶対ゆずらねぇ！絶対にだッ！！」

たまらず、映司がついに口にだした。

「ちょっといい加減にしろよ！『アンク』ッ！！」

「…ん？」

「アンク？…映司さん、目の前にいるのヴィータ副隊長ですよ」

「あ…」

アンク……

映司は棒立ちになり、なにも話さなくなってしまった。さすがに二人は異変に気づいたのか、映司を心配する。

「お…おい、映司、どうしたんだ？本当に怒っちゃったのか？」

映司は今まで誰にも見せたことのない、暗い表情で、無理やり笑いながらヴィータに言葉を返した。

「う…うぅん、大丈夫だよ、ヴィータちゃん、わかってもらえれば良いんだ、…じゃあ、二人とも…お休みなさい。」

映司はそのままトボトボと部屋に帰ってしまった。

「ヴィータ副隊長、…映司さん、どうしちゃったんでしょうか？」

「…わかんねぇ、…映司…。」

「ん？映司くんの様子がおかしい？」

「そうなんだ…はやて…。」

ヴィータは　はやて　の部屋に訪れ、先程あったことを　はやてに話した。

「あいつ、いきなり怒り出したとおもったら、いきなりテンション落としやがったんだ」

「ふ～ん…映司くんがそこまで気を落とすこと、…なんやろ？」

「な、なぁはやて！どうすれば…」

ヴィータは思わず泣きそうになった。
そんなヴィータに　はやて　は頭を撫でる。

「大丈夫や、ヴィータ。映司くんのことや！明日にはすっかり元通りになってる！」

「う、うん…」

「ほな、今日は一緒に寝よか、な？」

「うん…ありがとう、はやて」

次の日、はやて　とヴィータは朝ご飯を食べているとその場に映司

が現れた。
…しかし…

「あ、映司、おはよう。…ッ！！！！！」

キャアアァァァァァッッッ！！！！！！！

フェイトの悲鳴がその場に響きわたった！

「なんやなんや！ッて、映司くん！服、服！！」

「え？…あ…」

映司はパンツ一丁だった。

「え、映司…」

「だ、大丈夫やヴィータ！たまたまや！」

しかしそうでもなかった。

その後も映司は牛乳に氷をいれたり、壁によくぶつかったり、じぶんの部屋と間違えて　なのは　の着替え中に入りディバインバスターを浴びせられる…など、完全に上の空だった。

はやて　とヴィータは再び会議をしていた。

「あかんな…完全に映司くん頭いってるなぁ」

「…こんな映司は嫌だ…」

ヴィータは深刻な顔になる。

「…ヴィータ？」

「…映司は、お人好しでいつも笑っていて、私のこと子供扱いして…そんな映司が好きなんだ！私は、今の映司は嫌だ！！」

ヴィータがいきなり大声をだし、はやて　は驚く。そしてヴィータはなにかを決心した顔つきになった。

「はやて…私にまかせてくれ！私のやり方で映司を元に戻してみせる！」

「（…ヴィータ…）わかった、必ず元の映司にしてくれな！ヴィータ！！」

「おう！はやて！」

ヴィータはそのまま部屋をでて、映司の元へと向かう。

「私のやり方…よく自分でもわかんねぇけど…1つだけ、『あの時』みたいに心が通じ会うやり方がある！待ってろ！映司！！」

その頃、映司は隊舎の外を散歩していた。

「…アンク……」

―おい映司！アイスもっとよこせ！！―

―映司、こいつにはこのメダルだ！―

―お前の掴む腕は、もう俺じゃないってことだ…―

「…アンク…ごめんな…こっちに来てから、お前のこと忘れてたよ。俺はもともとお前を復活させるために旅してたんだよな…でも、はやてちゃん達を見捨てることなんて、できないよ…」

映司はその場に立ち止まった。

「俺、何をすればいいんだろう…わからない…」

…いじ！

「…ん？」

映司！

遠くから1つの物体にが映司めがけて突っ込んできた！

「な、何！？」

「映司ィィィィィィッ！！！！！！」

「な、ヴィータちゃ…」

「せいやぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ！！！！！」

「あああああぁぁぁぁッ！！！！！」

次の瞬間！ヴィータのドロップキックが決まり、映司は吹き飛んだ！！

「ちょ、ヴィータちゃん、いきなり何？」

ヴィータは倒れている映司の前に仁王立ちになり、人差し指を向ける！

そしてヴィータは…

「映司！今日、午後からお前に決闘を申し込む！！」

「…えぇ？」

映司に決闘を申し込んだ！

今、激戦が始まろうとしている…。

０２０話　決闘と晴れた心とサゴーゾ

機動六課の訓練スペースで、
今、映司とヴィータによる決闘が始まろうとしていた。

「いいか、映司。私が勝ったらお前は私にアイスを毎日買ってくれると約束しろ、もし私が負けたらスバルの今までのアイスの損害額を全部払う！」

映司は少し呆れた。

「わ、わかったよ・・・でもなんで模擬戦なの？」

「うっさい！小さいことはいちいち気にするな！！」

離れたところで六課メンバーが二人の対決を観戦しにきていた。不安そうに見る者もいれば、二人の戦いを期待している者もいた。

「エリオくん、映司さん大丈夫かな？たぶんヴィータ副隊長は本気で来ると思うよ」

「大丈夫だよキャロ、映司さんかなり強いし。この戦い、まだわからないよ」

「『オーズ対ヴィータ』、面白い組み合わせの模擬戦だね。なのはは
はこの戦いどう見る？」

「う～ん…、ヴィータちゃんは近接での爆発力では隊の中でも一、二だと思うし…それに対して映司くんはメダルの組み合わせによってどんな状況でも対応できるね、…でもそれは逆に弱点でもあるね」

「ど、どういうこと？」

「状況によってメダルを変える…ということはその時に隙が生まれてしまうということ、それにその状況に最も適したメダルを変えないと逆に不利になる。コンボになればその分、疲労がたまって後の戦闘が不利になる、…どちらが勝ってもおかしくないよ、フェイトちゃん…。」

「はやてちゃん、なんで映司さんとヴィータちゃんの模擬戦の許可だしたんですか？」

「ん？やっぱ心配か？リィン？」

「当たり前じゃないですか！二人とも大怪我したら心配ですぅ…」

「大丈夫や、これはヴィータが映司くんに元気になってもらいたく

て始めたこと、なんで模擬戦なのか私にもわからんけれど、ヴィータにも何か考えてやってるんや、私はヴィータを信じる！」

「はやてちゃん…」

（いや、なんとなくわかるんや。かつて１０年前、なのはちゃんがフェイトちゃんに思いを通じさせるために戦ったこと…、ヴィータ、もしかしてあんたは映司くんの思いを感じるために戦うんか？）

ヴィータはデバイスモードのグラーフアイゼンを取り出す。

「言っておくけど手を抜くつもりはまったくねぇからな！」

映司はそれに続いてオーズドライバーを腰に巻き、タカ、トラ、バッタのメダルをセットし、オースキャナーを持つ。

「よくわからないけど、ちょっとの気分転換には良いかな、…いくよ！ヴィータちゃん！！」

久しぶりの活気のある映司の表情をみて、ヴィータは自然と笑顔になった。

「おう！映司！！」

「変身ッ！！」
「セット・アップ！！」

『ｓｔａｎｄｂｙ　ｒａｄｙ』
『タカ！トラ！バッタ！
タッ！トッ！バッ！タトバ！タッ！トッ！バッ！！』

ヴィータは騎士甲冑を身につけ、
映司はオーズに変身した！！

「いくぞ！映司！！」

ヴィータはグラーフアイゼンを持ち、オーズに突っ込んでくる！すかさずオーズはその攻撃をよけた、だが…

「どこ見ていやがるッ！」

「え？うわぁッ！！」

なんとよけたとおもったら、ヴィータは勢いを殺さずオーズへ方向転換し、腹部に一撃を入れた！その衝撃は凄まじく、オーズはその

場から数メートル吹き飛んでしまった。

「げほッげほッ…相変わらず凄い力だなぁ、でも俺だって負けないよ！！」

オーズはメダジャリバーを持ちヴィータに突っ込んでいく！その瞬間メダジャリバーとグラーフアイゼンがぶつかり合い、火花が飛び散った！

「ぐぐ…なかなかやるじゃねぇか、映司！」

「うう…ヴィータちゃんもね！」

二人の攻防戦が少しずつ増していった…

その頃、客席側では…

「いよいよはじまったね、フェイトちゃん！」

なのは　は二人の心配どころか、逆に嬉しそうだった。

「う、うん。…でもなのは、なんでそんなに楽しそうなの？」

「えッ！？そ、そうかなぁ、にゃはは…」

「…なのは……。」

「す、凄い戦いね、映司さんもヴィータ副隊長も一歩も譲らないわね」

「そんなことどうでもいいよティア！私は映司さんが勝ってくれればそれで良いの！！」

「あんた…まだアイスのこと引きずってるの？」

「当たり前でしょ！…食べ物の恨みは恐ろしいんだよ…」

スバルがまるで戦闘機人モードになった時のように恐ろしいオーラを放つ。それに対してティアナは半ば呆れたような表情になった。

「全く、たかがアイスぐらいで…ホントくだらないわね」

「え？でもティア、確かこの前、ティアの隠していたチョコレートを私が食べたら物凄い血相変えて…」

「わああぁッ！！でかい声でそれ言うな！バカスバルッ！！！！」

模擬戦が開始して約１０分たち、二人には変化が起きていた。両者とも最初にぶつかり合いすぎたせいか息が切れ始め、よく間合いを

とるようになっていた。

「はぁ…はぁ…」

（最初の一撃以外まともに攻撃を与えることができない…それどころか逆に攻撃が当たらなくなってきた、映司の奴もしかして学習しているのか？）

「はぁ…はぁ…」

（ヴィータちゃんやっぱり強いなぁ、身体に似合わないパワーと素早さ。手を抜いているつもりはないんだけど攻撃が全部かわされる、しかもあの小柄な身体のお陰でなおさらだな。）

数分間時が流れたあと、ヴィータが口を開いた。

「このままじゃ拉致があかねぇな、映司、悪いが次で終わらしてやる！」

「ッ！？」

「アイゼンッ！」

ヴィータはグラーフアイゼンのカートリッジをロードした。

『Ｇｉｇａｎｔｆｏｒｍ』

その瞬間、グラーフアイゼンは今までより数倍でかく、かなりゴツい形状に変形した。グラーフアイゼンの「ギガントフォルム」である。

「でえぇぇぇぇぇぇぇいッッ！！！！」

「ッ！！やばッ…」

そのままヴィータはオーズに対してグラーフアイゼンを高スピードで接近し、おもいっきり振り下ろした！しかし…

『タカ！トラ！チーター！』

「はぁ、危なかったぁ…」

オーズは咄嗟にタカトラーターに亜種チェンジした。ギリギリのところでヴィータの攻撃を避けていたのだ。

「くそ！よけられたか…」

「ッ！！う、嘘でしょ…」

オーズはヴィータの攻撃を受けた地面を見て驚いた。…身体一つ分のクレーターが出来上がっている。

もしこれをまともに受けていたらどうだったのだろうか、考えるだけでもぞっとする。

（ヴィータちゃん、ほんとに手加減なしなんだな…）

「だったら俺もいくよ！…オーズの力、見せてあげる！！」

オーズはタカメダルを取り外し、新たにライオンメダルをセットした！

（やっと本気になったか…）

「よし、来い！映司の自身諸共、全部私がぶっ壊してやる！！」

この時、映司は不思議な感じがした。

…戦っているのに、楽しい。いつもの殺し合いではなく、純粋な戦い…。

（なんだろう…戦っているのに、いつもみたいに嫌じゃない。むしろヴィータちゃんとの戦いが楽しい…）

「どうだ？なんかすっきりしないか？」

「え？」

ヴィータが突然問いかけてきた。

「映司がなんで悩んでいるのか、落ち込んでいるのか、私にはわかんねぇ。でもな、私にはお前の悩みを壊すことができる！こうやって正々堂々戦ってな！映司の悩みは私たち『家族』の悩みだ！一人で解決できないなら、私たちが助けてやる！！」

「ッ！！」

その途端、映司の心の中の霧が吹き飛んだ。

（そうだよ…俺…なに悩んでいたんだろう。アンクを選ぶか、はやてちゃん達を選ぶか…答えは簡単だったんだ！どっちも選べば良かったんじゃないか！！）

「…ありがとう、ヴィータちゃん！！お陰ですっきりしたよ！」

「…やっぱり映司は暗い顔より笑顔じゃないとな！」

ヴィータは仮面越しだが、映司がいつもの笑顔に戻った気がした。

「さて、改めていくよ！！ヴィータちゃん！！」

「おう！映司！！」

オーズはオースキャナーでベルトをスキャンする！！

『ライオン！トラ！チーター！
ラッタ！ラッタァ！ラト、ラータッ！！』

オーズはラトラーターコンボにコンボチェンジした！！

「いくよ、セイヤァッ！」

オーズはヴィータ目掛けてトラクローを放つ！

「ッ！！」

ヴィータはよけきれず、スカートの端を切り裂かれてしまった！

「は、早ぇな、これがコンボの力か、…でも私も負けてたまるか！！」

その頃、客席側の　はやて　とリィンフォース？は…

「ついにコンボを発動させましたね！！はやてちゃん！！」

「せやな、リィン！…なんとか映司くんの不調も直したみたいやし…お手柄やヴィータ！！」

「さすがのヴィータちゃんもこれにはたじたじですかねぇ？」

「いや…そんなことはあらへん」

はやて　が真剣な顔つきになる。

「確かに、スペック的にはオーズの方が一歩上や、だけどヴィータには長年の戦闘で与えられた『勘』がある」

「『勘』…ですか？」

「このまま一気に…ッ！！」

オーズは脚力アップしたチーターレッグでヴィータの周りをグルグルと走っていた。
しかしヴィータは全く動かない。

（どうしたんだろう…でもいい！これでッ！！）

ヴィータの後ろからオーズのトラクローが迫る！！
だが、次の瞬間ッ！！

「…ッ！そこだッ！！」

なんとヴィータがカウンターを仕掛けてきた！！

「ッえ！？グアァァぁッッ！！！」

オーズはグラーフアイゼンのギガントフォルムによる打撃をモロに喰らい、吹き飛ばされてしまった！！

「はぁ…はぁ…嘘でしょ、見えていたの？」

オーズはふらふらになりながらもその場に立った。

「残念だったな、いくら速くても映司には気配がありすぎる！タイミングさえ合わせればこっちのもんだ！！」

ヴィータはオーズから放たれるエネルギーを察知していた。

「こ、これじゃあ頭の光放っても意味ないな…どうすれば…」

―なんだ、ずいぶん面白そうなことしているんじゃねぇか―

「まただ…いや、もうわかっているよ…」

―映司、そのガキには小細工は効かない、力には力だ、このコンボでいけ！！―

「なあ、お前には聞こえないのか？なんで声だけで姿を現さないんだ！？『アンク』ッ！！」

空から二枚のコアメダルが降ってきた。

オーズはすかさずキャッチする！

「いいよ、アンク。なにか事情があるんだろ？でも俺決めたんだ、今やるべきことを精一杯やるってね！！」

―上出来だ、映司！―

「あいつ、さっきからなに一人でブツブツ喋ってるんだ？…ん？」

ヴィータは映司の手に握られているメダルに気づく！

「あいつ！メダルを変える気か！！させねぇ！！」

ヴィータはオーズ目掛けて接近する！！

「ッ！！まずい！！」

次の瞬間！！その場で大爆発が起こった！！

「な？なんや！？」

「なにが起こったんですかぁ！？」

「や、やったか？……ッ！！」

『サイ！ゴリラ！ゾウ！
サッゴーゾ…サッゴーゾッ！！』

「な、なんだこのオーズはッ！？ッウワァァァッ！！」

その瞬間ヴィータは強烈なパンチを喰らい、吹き飛んだ！

土煙から現れたのは、

白のオーズ、「仮面ライダーオーズ　サゴーゾコンボ」ッ！！

仮投稿　閲覧注意！

「は、はやてちゃん！また新しいオーズですぅ！！」

「白の…オーズ？、一体どんな力を秘めているんや？」

観戦者達は初めて現れたオーズのコンボに驚いていた。

「…な、なんなんだ？あのオーズのパワーはよ…」

ヴィータは体制を立て直しオーズを睨む。

オーズが新たに変身した「サゴーゾコンボ」は、「サイ」「ゴリラ」「ゾウ」の三つのコアメダルからなるコンボである。頭はサイを模様した形に、腕はゴリラのように太くなり、ゾウのようにたくましい足へと変わった。
サゴーゾコンボはガタキリバコンボやラトラータコンボのように連続攻撃や俊敏な動きはできないが、反面、パワーと防御力は爆発的に上昇し、正当な一対一の戦闘で真価を発揮するコンボなのだ！！

「いくら姿が変わっても…ッ！！」

ヴィータが高スピードでオーズに近づき、グラーフアイゼンを振り下ろした！
しかし、

「ふんッ！！」

「ッ！、何ッ！！」

なんとオーズはギガントフォルムのグラーフアイゼンを片手で受け止めた！！

ヴィータは察した。
今のオーズのパワーは異常に上がっていると…！！

「ハァッ！！」

「グアァッ！！」

そのままオーズはヴィータをつかみ、投げ飛ばした。ヴィータは咄嗟に受身を取り、体制を立て直す！

「はぁ…はぁ…マズイな、今の映司は尋常なほどパワーが上がっていやがる…。一旦上空に上がって策を練るか…」

ヴィータは飛行魔法を使用し、上空に上がった。
しかしオーズはそれを許さなかった！

「させないよ！！…ウオォォォォォォォォォォォッ！！！！！」
オーズはゴリラのように胸をドラミングし始めた！！

「なッ！？あいつ一体何やって……ッ！！」

ヴィータは自身に起こる異変に気がついた。
…体に異常なまで何かに圧迫されている！

「なのは…もしかして、これって…！！」

「うん、今のあのオーズは『重力』を操れるみたいだね、…凄いな、本当に一対一だったら私でも手こずっちゃうかな…」

サゴーゾコンボの特殊能力は「重力操作」である。
これによりオーズの標的となった者を重圧を上げ身体に負担をかけたり、浮かせることもできるのだ。

「ウオォォォォォォォォッ！！！！」

オーズによるドラミングがさらに増していく！

「く、くそッ、身体が重くてこれ以上滞空することができねぇ…ッ！」

ヴィータは耐え切れず、ついに地面についてしまった。

「よし、今度はこっちの番だ！」

オーズはズシン…ズシン…、と足音を立てながら徐々にヴィータへと近づいてくる。
重力による圧迫から解放されたヴィータはグラーフアイゼンをオーズへと向けて構えなおした。

「空に飛ぶことが無理…となると、力と力の勝負ってことか…」

ヴィータは少し微笑んだ。

「悪くねえな、どちらが先にくたばるか…。さぁ、行くぞ！映司！！ハアァァァァァッ！！」

ヴィータはオーズに向かって走りだした！

「いくよ！ヴィータちゃん！！ウオォォォォォォォォォッ！！」

オーズも走り出す！

グラーフアイゼンがオーズへと振り下ろされる！

オーズのパンチがヴィータへと放たれる！

「ウワァァァァァァッ！！！！」
「アアアァァァァァァッ！！！！」

次の瞬間、二人の攻撃が同時にあたり、お互い吹き飛ばされる形になった！！
二人はよろめきながら立直し構える。

「まだまだ…、勝負は…ここからだよ…ッ！」

「まだ…、負けた…わけじゃねぇ…ッ！」

そして再び二人の攻撃が同時に当たった。
…完全に殴り合いである。

「映司さん…ヴィータ副隊長…大丈夫かなぁ？」

「さ、さすがにちょっと見ている方もあんな戦いみせられると良い

気分にはならないわね」

「でも、さ。二人見ているとなんだか楽しそうだよ、ティア」

ティアナは頭にはてなマークを浮かべた。

「どういうことよ、スバル」

スバルは現在戦っている二人を見ながらそのまま話し続けた。

「だって、映司さんは顔隠れてわからないけど…ヴィータ副隊長の表情、辛いとかそういう顔じゃなくて自分と対等な人が現れて嬉しいって顔してるから！…二人ともボロボロだけど、動きはとても生き生きしてるように私は見えるよ！！」

「なんか、あんたがそう言うと…なんとなく私もそう見えてきちゃたじゃない。

でもこういうの…悪くはないかも…。」

ずっと殴り合い続けたため、二人の身体は既に限界を超えていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7376z/

ooo after ～夜天の主と欲望の王～

2012年1月14日20時53分発行